
魔法少女リリカルなのはRewrite

由真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Rewrite

【NZコード】

NZ9916N

【作者名】

由真

【あらすじ】

『転生者、暴れます』

ある日、ひとりの少年が交通事故で死ぬ。

本来はそこで人生は終わりなのだが、どこからともなく現れた女によって転生させられることになる。

命令は、『蒼く澄んだ瞳の少年を探せ』……。

その訳の分からぬ命令と僅かなヒント、そして対価に得た超常的な力を手に、少年はこの世界をひた走る。

途方もなく深く黒い交錯、そしてその運命に巻き込まれる一人の少年と魔法少女達。

魔法少女リリカルなのはRewrite、始まります。

P r o l o g u e (前書き)

勢いでプロットから能力まで4時間で決めた。後悔はしてない。

ほかの知らない人とかの見知らぬネタと被つても振り切る覚悟で書いていきます。

……だけど、知ってる作品とは極力被らないようにしないとね……

Prologue

ここは地球。

取り留めて何もない、我々がよく知る地球。

強いてあるとすれば、昨今から云われる地球温暖化、異常現象などが謳われる。

そんな地球の日本、とある都道府県の郊外の道をひとりの少年が歩いていた。

見た目は至って普通だ。どれを取つても一般的なルックスと身体能力。背は若干低い。

ただ、頭の中身は日本の高校生では最高クラスにある。

「はあ…帰つたらまた勉強なんだろ? な。 いつたい息子の人生をなんだとつてんだ」

少年はぶつくさ言いながら、音楽プレーヤーを片手に街路をひた歩く。

聞いている音楽は『PHANTOM MINDS』。

もちろん、劇場版魔法少女リリカルなのはの曲だ。

そう、彼は所謂オタクと呼ばれる人間である。

親に隠しては、アニメグッズを買える範囲で揃えては楽しむ。親は

それを許してないから、見つかれば思い切り説教されし、集めたものはことごとく捨てられた。

その中でも、とある声優が一番大好きであった。機会があれば、ライブコンサートにも行きたいと願う程である。

この曲があまりに好きなものだから、これを聞いている時は文字通り何も聞こえなくなる。

……そんな時、悲劇が起きた。

「えつ

」

気付いた時には、トラックが目の前に迫っていた。

「うひ……

少年は目を覚ます。

先程まで目の前にあつたトライックはいざくへ、あたりは上下左右真っ暗でしかなかった。

しかし、地面にいるという感触はあつた。試しに未だに身に付けていた時計を落としてみたら、コツンという音がする。

「くそ……こいつたいどこだよ、ここには。まさか死んだんじゃないだろうな」

自分で言つたのにも関わらず、まず死んだらうなという思いを持つていた。

少年は最後に見えた映像のブレ方から速度を割り出し、見えた感じの仮の質量、予想ブレー キ位置等を考慮した結果、醜い肉の塊になるのは必至だということが分かつた。

だからこそ、がくつとうなだれる。

「マジかよ…………案外ポツクリ逝くもんなんだな、人間って

そんなことを言いながら、少年の瞳は絶望には染まっていなかつた。実際、生きているほうが地獄だと感じる時期もあつたんだ……それなら、別にここで終わつてもいい。

「……だけど、願つことなら」

オタクの人間なら、誰もが憧れる二次元。そこで最高の力を得て敵を蹂躪し、女の子に好かれたい。

そんな願望を抱いても、所詮それはエンターテイメント。二次元に行けば、二次元が自分の三次元に昇華されるだけに過ぎない。

い。
……だが、少年はそうしたくて二次元に行つてみたいとは思つてな

と云ふか、恋愛は正直さでもいい性格だった。

ただ、生まれ変わるなりこの世界よりかは別の世界で生きたい。その程度の願望である。

そして、それを思ったとほぼ同時に、正面の足元に幾何学的な紋様が浮かび上がったかと思うと、そこから人が現れた。

少年は慌てて飛び立つ。

「…そこまで驚くかしり」

魔法陣から現れた人は女性とおぼしき声を発する。

黒いフードを被つており、全容はよくわからぬかわすかに見える
肌を見る限りでは女性であった。

「いや驚くつて。で……ここは死後の世界であつてゐるのか？」

馬燈が見えると「

「大してかわらないじやん」

少年はため息をついた。

それは女にひとつばかりでもいいことで、スルーして話を進めはじめる。

「ところで、あなたは願望があるんじゃない？」

「え……」

少年はドキッとする。まさか心の声が聞こえたんじゃないだろうかと。

「ふむ。第一の人生を歩みたいのね」

「駄々モレー？」

少年は嘆いた。しかし、女は待つことをしなかつた。

「その願い、叶えてあげる。ただし強制イベント」「え」「

強制イベントといつも単語にげんなりとしたが、自分のやせやかな願望が叶うならまあいいかな……少年はその程度に思っていた。

「まあいいじゃない。見た目や能力はあなたが望むものを差し上げましょ」

「……それがいわゆるチートや厨一設定と呼ばれるものになつてもか」

「ええ、もちろん」

わずかに心が高鳴る。と、同時になんだかんだで最強に憧れる自分が悲しくなつた。

「でもやつぱり強制イベントで」

「結局かい！！」

「ええ。容姿はイケメンで良いわよね？そうね、茶髪で黒く澄んだ瞳でいいかしら。体は……9歳ね」

「待てい、なんで9歳なんだよ」

「対価よ、文句ある？それともこのまま死ぬ？」

「若返りサイコオオオイヤツフウウイイイイイイイイイイ！」

少年はただでさえ生き返れて、さらにも能力をくれるとこつに出て過ぎた真似だと思った。

「そうやつ……能力に何か注文は？」

「注文？」

「どうせなら好きな能力は最低限使いたいですょ」

そもそもうだとうだと思つ。そう考へた少年は女に軽く耳打ちした。

「……なるほど。だけど三つの能力については一部改変させてもらいうわ。それはベースが悪いと宝の持ち腐れになるから……」

「ああ、構わない」

「なら……決まりね」

女は妖艶に微笑む。

と、そこで少年は女に疑問を投げかけた。

「それで。俺になにをさせたいんだ？転生させてこんな能力まで寄越して」

「…………暇潰しだ？」

「オオオイ！……」

「さ、いってらっしゃい」

女は指をパチンと鳴らす。すると奇妙な風の奔流が少年を包み、足元に幾何学的な紋様が現れた。

すでに、その能力が付与されていたからか、少年にはそれが「転送魔法だ」ということがわかった。

「テメツ、ビニ飛ばす氣だ！」

「地球よ」

「地球かよ！」

また逆戻りかと、少年は怒鳴る。

「地球といつてもあなたの地球じゃなくてよ」

「はあ！？」

「そこへ行つて、あなたは茶髪で蒼く澄んだ瞳の少年と出会いなさい。大丈夫、変なことしなければ会えるから」

「はあ！？」

「ヒントは、魔法少女、守護騎士、闇の書……そして時空管理局」

少年を包み込む奔流が激しさを増し、ついには少年の体を飲み込んだ。

「大丈夫、失敗したらリプレイ出来るから 頑張れ少年」

「うひょ、待てよおおおおおおおおーーーー！」

少年は、そのまま魔力の渦に飲み込まれた。

取り残された女は、上を眺めながら呟いた。

「少年の道に、幸おおかう」とを

「」は時々管理局といつ組織が管理している世界のひとつ。

あたりはすでに暗く、遠くでは森のせわめきや生物の鳴き声も聞こえる。

その寒氣際立つ森の中を、一人の少年と一匹の異形な何かが駆けていた。

「ダアアアッ！……」

少年は襲い掛かる敵に気合の一閃を振るひ。

その一撃は敵を簡単に切り裂き、敵は血の飛沫をあげる。

しかし、敵の猛攻は止まらない。

「来るなッ来るなアアアアアー！」

絶叫しながら、正確無比な攻撃を叩き込んでいくが、敵は倒れる事を知らない。

さて、この少年の説明をせねばなるまい。

少年は茶髪で寝癖が酷くなつたような髪型で、体躯はまだ10歳程度のものだった。身に纏うのは、病院に入院する子供が着るような病院着に似たもの。

そして、少年の手には剣型のデバイスが握られている……と言つても非人格型で且つ、非殺傷設定などという魔導師のデバイスになくてはならないものを備えていない。

実質、合法質量兵器といつても過言ではなかつた。

少年は追いつかれては斬り、追いつかれては斬りを繰り返していた。それでも、斬つても斬つても速さは衰えるどころか逆に増しているように見えるのだから、子供には行き過ぎたホラー以上の恐怖を与えていた。

「来るなアアアアアアー！」

少年は、振り返り様に自分の限界にまで練り込んだ魔力を蓄えた剣で斬り上げる。

斬り上げた瞬間に、蓄えていた魔力を一気に解放したため魔力爆発

が起きる。

「ハアツ！はあ…ひつぐ……はあ…ぐ…はあ…」

激しい息切れと、8割以上が吹っ飛んだ敵の体を見たときの僅かな安堵からくる涙。

この時の状況は、同年代の子供は元より…大人でも堪え難いものであることは変わりない。

それでも、この10歳の子供は限界が見えていたとは言え耐えきつっていた。

しかし。

その安堵は次第に絶望に変わる。

完全にではないが、再起不能なまでに吹き飛ばした。
それなのに、どういうわけか敵は完全に再生していた。

「あつ…………あつ…………」

急に立ち止まり、胸の早過ぎる鼓動に体もついていけない…体力だつてもう限界を超えている。

早い話、立つて剣を構えているのも精一杯なのだ。

助けはこない。逃げても逃げられない。
唯一、助かる手立てがあるとするとするなら……血の手で敵を倒すしかない。

敵がゆっくり品定めをする。少年は固まつたまま、いや、それでも戦闘体勢ではあった。敵を見据えていた。

「……」で、少年の記憶は一寸途切れることになる。

Prologue (後書き)

閲覧ありがとうございます。

現時点では一人の主人公の名前は明かしてません。
一人についてはしばらく後になります。

とりあえず、転生させたほうから書いていきます。
応援していただければ、幸いです。

第一話 選択（前書き）

第一話……短いですが、『了承を。

第1話 選択

「ひ、ひぐ……」

俺…舞阪千里は田を覚ました。…オイ、女みたいな名前つづーな。

起き上がって辺りを見渡すと、今までの風景とは別の……とはいえた今までと大差ない世界が広がっていた。

「あのアマ……次会つたらシバいてやる」

いきなり転生だとかチート能力だとか。意味分からねえぞタコが。……まあでも能力をくれたのは助かる。転生させて命令をやれでハイオシマイだとどうしようもないしな。

とつあえず……くれた能力を確認するか。まずはそれからだ。

俺は手を軽く開いて念じる。

「…………ゲートオブバジロン
王の財宝」

すると、長いにかが輝きを放つて現れる。それを握つて確認すると愕然とした。

「…………まさか当たり前のよつて出るなんてな……『刃毀れを知らぬ剣』アロンダイヤ」

「

デュランダル

アロンダイヤ

絶世の名剣と一、二を争う名剣のひとつである刃毀れを知らぬ剣。
女が付与してくれた能力はしつかり起動する。
この分なら、約束された勝利の剣もちゃんと入っているだろう。
安心した俺はアロンダイヤを戻した。

そして次に必要なのは寝床。なければさすがに死ぬ。

……が、どうじょうか。正直なところ（ヒラリ）おつと向かメモ
が。

『仮住居 海鳴市南青山三丁目12-10 謎の美女より』

ちょ、美女で。つかなんて、都合主義。まあ今回はそれに乗っかる
としようか。

俺は住所が示す場所へ向かうことにしてた。
ナビ？ 魔法でチョチョイのチョイで！

「ここは示された住所にあったアパート。それなりに綺麗で、なぜか自分の表札もかかっていたので見つけるのはたやすかつた。

「うふ、じゅうしきさま」

カップめんを食した俺は、とりあえず布団の上に寝転がった。

「しかし驚きだな……質素とはいえ生活には困らないようになってるし」

食料も、当面は困らないようになっていた。しかし、どの道自分で稼がなきゃならなくなる。そうなった場合、自分で変身魔法をかけてアルバイトか……。

いや、そんなことを考えるのはよそう。

まず考えなければならないのは……女の発した言葉だ。

ヒントとして、女は魔法少女、闇の書、守護騎士、時空管理局と言つた。

そしてここのは住所。

「海鳴市……」

生前に貯めたアニメの知識を総動員させて、この単語が関わる作品

を探し出す。

無論、その答えはすぐに出了た。

「魔法少女、リリカルなのは

高町なのはが、魔法を通して仲間と出会い、敵と対峙して己の想いをぶつけ合つ熱いアニメ。

つーことは、今俺はリリカルなのはの世界にいるのか。
なんでリリカルなのは?と思つたが、それはどうでもよかつた。

つまり、魔法少女は高町なのは。

となれば、闇の書と守護騎士つてのはハ神はやてとシグナム達ヴォルケンリッターだろ?。

ここで、現在の時間軸はA, sだと判断した。

そして時空管理局。ここは…高町なのはが現在進行形で協力する組織だ。そしてこの世界で絶対権力を握る。

そして命令は、『蒼く澄んだ瞳の少年を探せ』。

全部照らし合わせたら、全員と何かしらの関わりを持つてということなんだろう。つまり、関係を持つつてのはこれらのキャラと何かしら接点を持ちさえすれば簡単だけど……。

「問題は、最初に誰の陣営に付くか」

A, sにおいての主な陣営は三つ。

一つはなのはら管理局。

二つははやてら「ヴォルケンズ」。

三つはギル・グレアムのとこだがまずこの選択はない。

原作に忠実になるなら、最初はなのはらが負けるようにするために
はやてらに付くべきなんだが…これから先を考えたら、なのはらに
付いた方が人間関係的に有利だ。

……まあ人間関係つかハーレムには興味ないし。なつちまつたら
なつちまつただ。

それに、なのはとフュイトの最強コンビは自分の能力を試すには絶
好の機会かも知れない。

「…明日は図書館行つてみるか」

あそこなら、必ずはやてに会えるはず。
そう決めて俺は寝た。

第2話 行動

次の日。疲れていたからか、昼前後に起きた俺はかるく昼食を済ますと海鳴市の一一番大きな図書館を目指していた。

理由は簡単、最初は八神陣営から始めようと思つたから。

え、管理局側なら楽じゃね？とか思う人もいるけど、それではいきなり原作ブレイクすることになる。それは原作者として正直回避したかった。・・・だけど、回避できる悲劇は回避したいかな。

といつわけで、田指す先は八神はやてがよく利用している公立図書館。とにかく、出会つてから勢いでやつていこうと思つた。ちなみに身長は132cmくらい。同学年ではかなりでかいほうだらび。

……まあ、じつせんやうじつな。

「さて、いじか」

なんだかんだ話していたら、もつ図書館が目の前に見えていた。

……分かっていたけど、でかい。

これは…自分が住んでいた街の図書館よりでかいんじゃないかな？

「……寒ッ」

思えばA、Sは秋が深まる季節。毎時とはいえ、寒くなるのでさつ

セヒ中に入ることにした。

中に入った俺は、蔵書の量にましても驚かされることになる。専門書や文献はもちろん、童話や最近の雑誌に文学小説、果てには漫画やラノベまで置いていた。

…漫画に関しては、魔法少女リリカルなのはに関するものは全くないということ以外変わりはない。

「うわ……ほんとになんでもあるな…。しつちにはバカテスに禁書録に超電磁砲…ライディーンとか誰が読むんだよ」

とか言いながら読んでしまうのがオタクの性。
元いた世界ではまだ売り出されていなかつたものを手当たり次第に読んでいく。

少年熱読中……

「く……ひ、まさかの血口犠牲かよ……泣かせてくれたのサ」

八神はやてにに念ひりとも忘れて、漫畫を熟讀していた。

ふつ、と本を閉じて壁掛け時計を見ると……

「ゲッ、閉館30分前！？」

ヤバい！本を読むと時間を忘れるところのせよべあるナビ尋常じやないぞ！？

急いで本を閉じて周りを早足で歩き回る。

すると、すでにお皿のものを手に入れたのが、はやは小さい赤髪で三つ編みの女の子…間違いない、ヴィータだな…が図書館から出ていくこととしていた。

見つけるが早し、追い掛ける。ヴィータから自らの魔力を察知されないよう、强度の認識阻害魔法をかけてから追い掛ける。

これなら、普通に歩いていてもばれることはない。
どうせバレンなら、ちょっと並走してみるか。そう思った俺は、
自然な感じではやて達に並ぶ。

「はやて、今日は何借りたんだ？」

ヴィータが車椅子に腰掛けたはやてに問い合わせる。

「ん？ 今日はちよつとした童話だけやよ、ヘンゼルとグレーテル。

帰つたらヴィータに読んだげるな」

「ありがとう、ばあちゃん

とても他愛のない、日常的な会話。やつあると……。

「ちよつとお嬢ちゃん。ボク達と遊んでいいかい？」

えー、なにこのテンプレ展開な感じで、チャラいお兄ちゃん達がはやてどヴィータに絡んできた。まあ9歳とはいえ素材がいいしなって感心してる場合じゃない！

「ほり、行こうぜッ！」

۱۰۴

「おいテメエはやでに氣安く触んじ」ロリコンかテメエらー！」つて誰だよー！」

「めんよヴィータ。こんなロココノヤンキーには我が秘伝の最終奥義をだすしかないんだよ。

「え、キミこの口のガールフレンド？」
「ヒューーカッコイイー（笑）」

ギャハハハハと下品な声で笑い出す。

いい世…ガキがガキ通りの能力通りだと勘違にするなら、その幻想をフレンドぶち壊す！！

「で?ボウヤになにか出来んの?」

「みっちゃんやめいやれぬ、ハイジびびつがやあああたああ

! ! !

俺の渾身の両拳を叩き込んでやつた。モチロン、手加減ハシテマス

ミ?

みつけやんといやうを吹つ飛ばしたためか、周りのヤンキーが激昂した。

「テメヒー（バキッ）がはつ！…」

「よくもやつやがつたな！…（ドカッ）ゴハア…！」

ザ「共が一テメヒー」ときが俺に勝てると思つた…まああの女のおかげだけじゃ。で、助けられたはやてどウイータは。

「……」

若干引いていた。
当然の反応だ。

「えと……大丈夫？」

「大丈夫やないな……後ろのお兄ちゃんらが」

まあ素手の全力で殴つたしな。少なくとも内出血は免れない。

「オマエ……体に異常があるんじゃねえか？」

「大丈夫、昔から体は丈夫なんだ」

「ああなんにせよ、助かつたわ。ありがとな？」

「いいえ、どういたしまして」

ぐあ、可愛すぎる。可愛すぎる代はやめて。つて待てー・断じて俺は口
リコンじやない！

「えと、良かつたら送つていこつか？またあんなのに襲われたらどうしようもなさうだし」

「んー……せやな。せつかくやしお願いしよか」

「でもはやて……」

「それに、ヴィータも公にはやれんやろっ！」

公にやれない……無論鉄槌の騎士の力だろうな。あれを使えばあんなのは簡単に潰せるだらうけど、一般人には使っちゃまずい。もちろん、あえて気にしないことにした。

「せやから。お願ひしよ？せつかくかつこええ男の子がボディーガードやつてくれるんやから」

「……分かったよ、はやて」

ヴィータは渋々頷いた。それを見て「うー」と笑つたまゝひそかにちらを見る。

「ほな、お願ひな?えど…」

「舞阪千里。千里でここよ」

ちなみに苗字は本来の苗字から変えた。昔の苗字は面白くなかった。名前を変えなかつたのは、やっぱり腐つても親から貰つた唯一のもの。愛着はある。

「私は八神はやで。はやででH-Hよ。」
「ヴィータ」

「じやあはやてH-Hヴィータ。よろしくな」

いつして、八神家に行くことになつた。

第2話 行動（後書き）

はい、第2話でした。

一話一話の短さは、勘弁してください。

駄作ですが、これからも魔法リリカルなのはRewriteをお願いします。

第3話 いや、こんな展開じゃなかつたよな（前書き）

実はA、Sはお隣の子にしか見てません。

「めんなさい。

第3話 いや、こんな展開じゃなかつたよな

で、俺は八神家のリビングにいる。「うーん……大丈夫かな……。魔力もちばれないかな……。主にシグナム姐さんとシャマルさんに。

「それでなー、この千里くんが格好良く現れてチンピラたちをやつけたんや！」

「う・・・ぱーーん！ てな・・・と、興奮しながら身振り手振りをつけ、シグナム達に説明するはやで。よっぽど助けてくれたのがうれしかったんだなと、俺はちょっと嬉しくなる。

「やうなんですか・・・千里くんありがとうございました！」

シャマルは深々とお辞儀をした。

「いえ、僕もちょっと怖かつたんですけどね」（副音声：余裕過ぎてハナクソが出そうでしたけどねｗｗｗｗ）

「別、こいつが出てこなくともあたし一人で倒せた」

「もう、ヴィータは意地っぱりさんやな」

「べ、別に・・・」

おーおー。顔赤くして顔そむけちゃって。動搖が見え見えですよ。それを軽く見届けて、はやはては車いすを動かす。そしてキッチンに向かいながらこちらに向かつて声をかけてくる。

「ほな、夜ご飯作るなー。よかつたら千里くんも食べてつてや？」

「い、いいのか？」

「うん、千里くんが良かつたら泊まつていいんやで？」

「いくらなんでも助けただけでそんな優遇されいいんかね？というか9歳とはいえ男なんだけど。とりあえず、シャマルとシグナムに視線を送つて見る。

「私はかまわないですよ」

「私も、主はやての命ならば」

「なんでだよシグナム。こんな胡散臭いやつ泊めていいのか？」

「主の命を聞けないのか？」

「いや、はやてがいいんならいいんだけどさ・・・」

そこでヴィータがどもる。少し怪訝に感じたシグナムは顔をしかめてヴィータを見つめた。

・・・やっぱいな、ヴィータのやつ俺の身体能力疑ってるな。魔法は使ってないけど、メローディア・ベラーナクス身体強化魔法はばれないよう詠唱破棄でかつネギまの『戦いの旋律』を使っておいたんだが・・・魔力は魔力って事か。成分が違つてもなにか使つたのは感じ取れるんだという事が分かった。

「まあ、なんにしても客人だ。もてなすぞ・・・ふむ」

「舞阪千里です」

「よろしくな、舞阪」

シグナムはあえて苗字で呼ぶのか・・・思えばなのはは高町、フエイトはテスター・一边倒だったな。

それはどうでもよくて、その時のシグナムの田が戦士を見るような目だった。

え、一（物理攻撃的な意味で）襲われるフラグ？

はやてのおいしいご飯をいただいてから、風呂に入りあー疲れた。と、リラックスムードでいた。その間、はやてに質問攻めを食らつていた。

「なあなあ、千里君はどこの学校通つてるん？」

「最近引っ越してきたばっかりだから。まだどこの学校行くとかは決めてないんだ」

「そうなんや・・・私は体に不自由抱えてるから、学校お休みなんや・・・」

そう言つて、若干憂鬱な顔をするはやて。そばで話をこいやかに聞いていたシャマルはすこし顔を強張らせる。

そりや闇の書の副作用だもんな。そんなことをうつかり洩らしたら最後、はやてがどう思つか考えただけで恐ろしいんだろう。

・・・やべ、フラグ立つよくなことはしたくない。でも、言わなきやなんか可哀想だ・・・。

「大丈夫だよ。治してやるつて気持ちをしっかり持つてたら絶対治るから」

「え、でも・・・」

「でも、待つたはなし。なんなら、俺が・・・大きくなつたら医者になつて治してやるよ」

「あはは・・・ほんなら気長こまつなな」

はやては苦笑いを浮かべる。いかんいかん、口が滑つて今すぐ直し

てやるなんか言つたら原作がいつにかおじさんだ。

「くあ・・・」

「はやでちやん、寝たいんですか?」

「ん・・・もう一〇時なんやな。ほな、私は寝る準備するわ・・・

」

ふわあ・・・と、かわいらしげ欠伸をしながら、はやは車いすを動かしていった。それを介護するためにシャマルが追いかけた。

・・・その時、何かしらの結界が張られた気がした。

この魔力の感じ・・・シャマルか。離れたと同時に結界が作動する術式を組んだようだ。それに呼応して、騎士服姿のシグナムとヴィータが飛び込んでくる。

「・・・9歳の子供にこきなり剣を向けてくる騎士がビリヒーのやう」

「悪いな、ここにいる」

と、レガランティンの切つ先をのど元に突き付けてきたシグナム。つこでに、ヴィータもグラーフアイゼンを抱いでいる。

「オマエ、はやてを助けるときに魔法使つたら。それはその辺の身体強化魔法程度のものは言え、アタシ達が見たことない術式だった」
しかもしつかりばれてるじ。

「貴様は何者だ?何の目的があつて主はやてに近づく

一触即発の雰囲気で接してくるシグナム姉さん。うーん……安い嘘は命を失いかねないな。

「あの子を助けるためだ」「われわれで事足りる」

だろうな。シグナムはそう言つ性格のはずだ。

「だけど、それが切羽つまつてるのは事実なんだろ？下手をすれば今年中に死ぬ」

「！・・・それは」

「！」に来て初めての友達になれそくなんだ・・・それに、救える命は救うべきだ

「・・・信用しようと？」

「信用するかはお前ら次第だ」

「アタシは信用しねーな」

「胡散臭いからか？」

「それもある。だけどお前にそれをできるだけの力あんのかよ」

ふむ・・・「」いつらからしたら未知数の力だもんな。それならちょっとだけ気合入れてみるか。

軽く、魔力を解放する。すると尋常じゃないほどの魔力の奔流を生んだ。

ちなみに俺は・・・膨大な魔術回路にネギ親子ですら到底適わない魔力、そして世界最高峰のリンカーコアを有している。こんだけありやあ信用を勝ち取るだけの魔力は十分すぎるだろ？

「これは・・・」

「どうだ？こんだけありやいけるだろ。なんなら、魔力を闇の書に食わせてやるよ」

「・・・そこまでして貴様にメリットはあるのか?」いへりヰを思つての行動とはいえ・・・」

「俺ははやてを救えたら十分だ」

シグナムはしばし考え込む。その未出した結論は。

「・・・わかった。貴様がいいとここのなら、協力してもうおつ」

「オーケー。もちろんはやてには秘密だぞ」

「無論だ」

とここのわけで、シグナムらと協力して蒐集を行つことになつた。といふか・・・。

「もしかして今から「行くとか言つんぢやないだらうな

「あ? 今からに決まつてんだらうが」

とここの事はもう蒐集がはじまつてんのかよ! なうじには少なくとも
10／27以降の話か。

「ん、じゃあ行こつか

「ああ」

そんなわけで、名も知らぬ世界に来ちゃつてます。藤岡弘がここで探検していくも絶対不信感を抱かないような密林にいつたい何があ

るんだよ？

「で、ここにリンクカー『ア』を持ってるやつがいるのか」

「ああ、そうだ。少なくとも僕は反応がある」

レヴァンティンの柄に手をかけながらしゃべるのはシグナム。今回は初めてという事でシグナムだけが付いてくれるそうな。しかし人っ子一人いない。さりげなく感じる不快感を無視しながら散策していると、突如魔力が増大するのを感じた。

「来るぞ！！」

シグナムの言葉で散開する。すると、数瞬おいて元いた場所に大きなクレーターができている。

回避しながら地面を穿った敵を確認すると、なんかFFの結構終盤に出てきそうな魔物がいた。

「アバドン……」

FF9に出てくるカマキリっぽいそいつは、体勢を立て直すと、すぐさまかまいたちを放ってくる。俺は万難排す魔除けの楯で防御したがシグナムは。

「はあ……」

ぶつた切っていた。おいおい、いくらなんでも暴挙じゃないか。

「いつの間に盾をだしたんだ！？」

「こいつが俺の能力なんですね。こいつは俺がやるから下がつてろ

「しかし「それに、俺の実力を見たいだろ？」「くつ……」

しぶしぶと、シグナムは下がる。よし、では行こうかね。

「來い、『雨叢雲』」あめのむらぐも

名前こそ日本名だが、実態は西洋型の剣。ヤマタノオロチを討つた際に出てきた剣で、その力は日本の宝具では非常に強力な剣だ。それを振りかざして、アバドンに斬りかかる。が、右のカマで受け止められた。

うげ・・何度も聞いても不快感を煽る鳴き声だ。雨叢雲で正面から受けた後、うまく受け流してアバドンの懷にうまく入り込んだ。さて、試したかつた剣技をここで出してみますか！

そう考えた俺は剣を縦に構えて魔力を溜める。思い切り溜めていいんだけど、溜めている間に攻撃を受けるわけにもいかないからさぐに解放した。

「ショック……！」

ずがああああん！！！

すると、アバロンが粉々に吹き飛んだ。・・・いや、いくら圧縮魔力を1点で思い切り解放する単体攻撃があんなに破壊力抜群とは・・・。恐れ入った。

「なんて無茶苦茶な・・・」

シグナムもむづかしくひき引いていた。「うめん、やつすれた。

結局、5匹のターゲットは俺が全部片づけた。

第3話 いや、いんな展開じゃなかつたよな（後書き）

千里「……で、非常に頭の悪い展開だつたな」

作者「やーせん…！」

千里「で、A・Sもぜんぜんと」

作者「う…」

千里「まつたく。そんなでよくA・Sから書くうなんて思つたな」

作者「しあわせがないじゃないか…書かない」と置いて無駄に練つた原作をベースとしたオリジナルの展開考えてたし。それにはどうしても「」から書く必要があつたんだよ

千里「まずはA・Sを見ろ！」

作者「大丈夫、細かい描写はともかくあらすじはなんとか押さえてるから」

千里「やーで」

作者「それではこんな駄作を読んでくださつた方には多大な感謝を。それでは次回はなのはsideにも介入します！」

第4話 介入

それから守護騎士の収集を手伝い終えた俺の今日の宿は、そのままハ神家のお宅になった。

その際の部屋割なんだが……。

「別にザフィーラとリビングで寝てたらいだり」

「それは酷い仕打ちよ、ヴィータちゃんーはやでちゃんを助けるために協力してくれてるのにー！」

「コイツ男なんだから一緒に寝れないだろーが！」

「…………そもそも、我等は防衛プログラムに過ぎないだろつ」

ヴィータとシャマルが無茶苦茶揉めた。端からちよつとだけザフィーラが口を挟んだがスルーされている。

「なあ、ヴィータっていつもあんなのか？シグナム……」

「残念ながらな。主はやてには懷いているんだが」

やれやれこれだから末っ子は……といった感じでかぶりを振るシグナム。

なんかこれを見ると……あれだ、シャマルが優しい長女でシグナムがクールな次女、ヴィータがやんちゃな三女なんだな。そいではやてがお母さんでザフィーラがペットみたいな。

後今はまだいいないリインフォースがお婆ちゃんで、リイン？が末っ子。

要約すると…… 団子大家族ならぬハ神大家族。

やべえコレツボッた~~~~~

一人で妄想したネタで腹を抱えて笑いを押し殺していくと、シャマ
ルがこちらまでやってきてしゃがみ込んだ。

「どうかしたの、千里くん？なんかピクピクしてるけど……」

「だ、大丈夫……笑い堪えてるだけだから」

「何もおかしいことないのに、笑ったのか？変なヤツ」

ヴィータが呆れたようにため息をついた。

いやそれがね、三女よ。私めが考えた八神大家族ネタがですね……
……

「ブハツ~~~~~」

吹き出したらヴィータにグラーファイゼンで鳩尾を強打された。

「テ……メヒ……ツ」

絶息してまともに話せねえ…………つかいくら俺でも生身でグラ
ファイゼン強打は死ぬわ！！

「今すぐ馬鹿にしたこと考えてたら
「め、滅相もございません……」

でもいつかはネタにしたいと、そう考える俺でした。

結局、シグナムの部屋で寝ることになった。

理由はザフィーラはリビングなので除外、俺と一緒に嫌なヴィータはダメ、シャマルはヴィータが何か俺にするんじゃないかと疑いだして却下。

なら三人纏めて同じ部屋はどうかと言つてみたが、それは俺が9歳の子供だからダメだとのこと。

で、シグナムの部屋。

「凄く片付いてるな……」

「まあ特に置くものなどないしな

一般的な学生に似た景観だけど、唯一特異といえば隅に置かれている剣道用具。そういうえば近くの剣道場で非常勤講師してたんだつか。

「どうか一人で寝てる?」

「まあ、な。覚醒当初はみんなで寝ていたんだが、主はやでが、な

「……分かった。言いたいことは分かる」

シグナムが自分の胸を見ながら言った時点でそれはほんてのセクハラを単に嫌がつたということだ。

「…貴様はさすがにしまいな？」

「いやもったら犯罪だから。女の子同士だから許されるんだよ」

まだ俺は死にたくない。

そんなこんなで寝た。

え？ ラッキースケベなんてあつませんけど何か？

それからじしまじらへじりこううわけかハ神家で延々お世話になつていた。

はやては親に心配かけてるんじゃないかと心配したが、その辺はシヤマルがじまかしてくれた。

もちろん、蒐集のお手伝いもしている。俺が宝具を出す度にシグナム達には驚愕の目で見られた。

曰く、『貴様バクだる』。

バグですよー、謎の女の差し金です。

そんなんある日、ヴィータがはやでがシャマルと買い物に出かけた頃を見計らってシグナムと俺を呼んだ。

「どうしたんだよヴィータ」

「昨日この街でデカイ魔力反応を捉えた。推定AAA」

そいつは間違いなく将来の魔王、高町なのはだな。もちろん口には出さない。

「ふむ……意外だな、そういう奴がいたとは」

「それで、どうするんだよヴィータ」

「もちろん、リンクアコアから魔力をいただく。あたしがやるからな」

やる気満々だな、ヴィータ。シグナムはふむ、と頷いた。

「分かった。ならばおまえに任せん」

ヴィータは分かったと言わんばかりに服装を騎士服に変える。グラーフアイゼンを抜ぐと、そのまま空へ飛んだ。

「…………」

「ん? どうした舞阪

「いや、なんでも」

しかし俺としては魔王とH�ンカウントはしておきたい。

……よし、スキを見て「心配か?」ぐあ……。

「ま、まあ…なんせ能力的にはヴィータと同じだから

「確かに能力はヴィータと同程度だ。が、本当に実力は同程度か?」

アンサーはノー。だが、なのはにはお話聞かせてがある。それを考
えると、少々不安だ。

「けど、有り得ない」とは有り得ないから。だから心配だ

「フツ……優しいな、貴様は」

ぐりぐりと頭を荒撫でしていくシグナム。ちょ、痛い痛い。

「そんなに心配なら、しばらくしてから付いていくといい。その代
わり、ばれないようこじろよ? アレはアレでプライドがあるからな
「分かってるよ」

そう言つと、俺は自分にステルス魔法をかけるとフライヤーフィン
でヴィータが向かった先を追い掛けた。

俺が問題の地点まで来ると、すでに結界が張られていてヴィータはなのはと交戦が始まったようだ。

さて、これ通過するのは……無理だな。干渉が出来ないタイプの結界だ。本来なら干渉不可能だが、俺は出来ます。

そう、影を伝う魔法。いくら干渉阻害結界を張つても、自然現象までは制限できない。といふか自然現象を阻害する結界は術式が複雑で一種の禁術だから使い手はほほいない。

なので、この転移魔法。これによつて結界内に入り込んだ。

「……そこか

それから、魔力の淀みを感覚を研ぎ澄ませて感知する。

あ、片方の魔力がブレた。そろそろなのはがぶつ飛ばされたあたりか。なら、ヴィータがなのはに詰め寄つた時点でフュイトが来る。

「急ぐッ」

「う、うぐ……」

「諦めな。助けなんかこねーよ」

あたしはアイゼンを構え直した。

あたしが捉えた反応の持ち主は確かに栗毛のこいつだ。だけど、意外とテキるやつだった……。なんなんだよあの有無を言わせない砲撃。ちょっと貰つちました。

まあいいや、とつととリンクカー ノアを頂こいつ。

そう手を伸ばした瞬間

『ハアッ！！』

「なっ！？」

突然だつた。栗毛の前に魔法陣が現れたかと思つと金髪が出てきた。まさかの展開だ……間に合つつか！？

「せりせるかよ

ガキンッ

「ツーーー！」

それを誰かが受け止めた。

それを見て金髪と栗毛が驚愕していた。あたしも驚愕していたと思う。

だつてそいつは、家に置いてきたはずの

「悪こな、こじつけ……ちがはねーよ」

舞阪のヤローだった。

第4話 介入（後書き）

作者「はい、第4話でした」

千里「そしてようやくまともなバトルか…」

作者「予定よりかは早いかな？ 戦う前になのはと絡み用意したけど省いた」

千里「まじかよ……」

作者「さて、読んでくれた人には多大な感謝を。次回予告はついにフェイントとの初バトル。見知った以上の機動力に千里は！？」

千里「次回も楽しみにしてくださいな」

第5話 激突！VSファイト

ふう。なんとか間に合った。しかし、さっきのを見るとヴィータのやつ間に合ってなかつたな。

やっぱり本当に紙一重のタイミングだつたんだな。

「オマエ・・・なんで・・・」

「なんでつてそりや仲間の心配して悪いかよ」

「アタシ一人で十分だつづーのーー！」

ぐう・ぐう・ツンデレ。可愛いけど今は戦闘だ。気を確かにしないと。

「私は時空管理局嘱託魔導師フェイト・テスター・ロッサです。危険物所持と一般人傷害の罪で逮捕します」

「断ると言つたら？」

「・・・実力行使です！！」

そう言つて間髪入れずにバルディッシュで斬りかかつてくるフェイト。もちろん俺は当たるはずがない。ついでにヴィータをひつつかんで空域離脱した。

「つて当たり前のようにつかむなーー！」

「ンなこと言つたつてお前連れなきやお前が捕まるだらうがーー！」

「それは・・・そうだけよ・・・」

なんかどもるヴィータ。全く素直じゃないな・・・つてもう追いつきやがつたかーー！

「下がつてろヴィーターー！」

そつと置いて俺はさうに投影した干将・莫耶で受け止めた。くそつ、意外といい攻撃じゃないか！

「はあああああ……！」

「ちひ……！」

そのまま斬撃の応酬をする羽田になる。隙を見つければ狙うが、二つの持ち前の速さで全部躱される。

「ヴィータ……！」

「なんだよ……！」

「シャマル近くにいるんだろ……？俺がここにいら惹きつけておくから今の中にリンカーノアの魔力を闇の書に食わせろ……！」

「バツ、相手はAAAの魔導師だぞ！？」

「大丈夫だ、俺を信……」「させない！」くそつ……！」

だああああ、なんでこいつは話の途中で……まあ俺もそつするけどよ。話を邪魔されるつてこいつ気分なんだな。

「……つたぐ、負けんじやねーぞ」

「わかってる」

諦めたヴィータは前線を離れた。それを見届けた俺はフェイトに向きなおった。つて、ユーノとアルフもやってきた。こいつは厄介だな。

「3対1。君も、この状況はわかるよね？」

「まあ、俺はピンチだな」

「……なら、無駄な抵抗は「かといって諦めると思つたか？」な

！？

「先ずはお前の動きを縛る！」

干将・莫耶を戻し、俺は拘束魔法で縛った。術式は適当に組んだので名前とかはまだ決めてない。

「なつ、無詠唱でこんな尋常じやない硬さなんだい！？」

「はつ、俺をなめるな！！」

「アルフ！！このおおおおおお！」

「おいおい・・・アルフが動けなくなつたくらいでヤケになるなよ。おかげで太刀筋が見え見えだぜ？」

攻撃があまりに素直になり始めたので攻撃をよけるのは簡単になつた。それでも攻撃を当てにくいのは相変わらずだけど。

その時、俺の両腕を緑の鎖が縛つた。この魔力光・・・ユーノか。

「悪いけどこれで動けなくさせてもらひつよ
「これで縛つたつもりかよ」

あつたりとハンドブレイクして自由の身に。それでも若干のタイムラグができてしまい、フェイトに攻撃の隙を与えてしまった。

「ハー ken、セイバ―！」

自動追尾型の魔法、ハーケンセイバー。避けても追いかけてくるのは厄介だな・・・なら。

「来い、アロソンダイ無毀なる湖光」

かの約束された勝利の剣と対をなす、刃毀れを知らぬ神造兵器。そ

エクスカリバー

して竜殺しと親族殺しの魔剣。

このアロンダイトを振るい、ハーケンセイバーを碎いた。そのまま驚愕するフォイトの隙をついて背後に回り、蹴り飛ばす。

「ああああーー！」

「フォイトーー！」

あ…やべ、やつといて可哀相とか思つてしまつた。だつて女の子だし。

とか言つてたらヴィータから念話が来た。

(おい、千里！)

(どうしたヴィータ)

(魔力はきつちり頂いた。もう大丈夫だからさつさと逃げろーー！)

(は？どうし

54

……待てよ？時間的にはもうなのはの魔力はある程度回復している。
そして準備時間はきつちりあつた。

そして…………脳裏にちらついたのは、アニメのあのシーン。

「く、間に合つかーー？」

「ま、待て！」

魔力の尋常じやない集束を感じた俺は、すぐさま転移魔法で逃走す

る。

フェイトがなんか言つてたけどスルーだ！

俺が転移しきつたコンマ3秒後。俺がいた場所を桜色の集束砲撃が穿つたという。

この話は後程フェイトから聞かされることになる。

- Side Kurono -

くそっ、なんなんだ一体！

なのははやられ、フェイトとアルフは為す術なし、せりひはユーノのバインドも素手で壊された。

極めつけはあの少年が持つ稀少技能とおぼしき能力。

……武器を自在に出し入れする、しかも計測では何かしらの能力が付与されていた。

「強敵……なんかじや生温い……」

あとＫＹな男とかクソ真面目とか言ひシラコリする奴はエターナルコフайнで凍付けだッ！！

『……クロノ？よく分からぬけど、変な心の叫びが聞こえたよ？』
「気にしないでほしー…。フェイトにはまだ早い世界だ」

『？』

ああ、フェイト。そんな可哀相な目で僕を見ないでくれ。

『それよりクロノ。彼等の事だけ』

「ああ。映像は確認した…なんなんだアレは」

『分からぬ……あの茶髪の男の子は武器を一瞬で出し入れして、瞬時に対応してきた』

『私の砲撃も、当たる直前の一瞬でかわされて逃げられたの』

『それは多分転移魔法のひとつじゃないかい。一瞬だつたから少量だけど魔力を感じた』

『フェイト、少年の武器の出し入れに何かしら異変は感じなかつたか？』

『分からぬ…。ただ、最初に出してきた黒と白の剣で攻撃を止められた時には何か魔力防御に似たものを感じたよ』

ふむ……やっぱりにも程がある。情報が足りなさ過ぎる。しかしについても、調査が必要だな。

『分かつた。フェイトとアルフはある程度回復したらアースラに戻

つてきてくれ。ユーノとなのはは魔力と体力回復に専念する」と

『あ、あのー』

最後になのはが若干焦った顔で言葉を遮りてきた。

『赤い女の子の攻撃と最後のスター・ライトブレイカーで、レイジングハートが……』

「分かつた、家に着いてから転送してくれ。シャリオに頼んでおこう」

『ありがとう……クロノ君』

なのははこっこり笑顔で言つ。ひょと可愛い。

…………そしておも、対策を練らなきやな。

「あの子の魔力凄いわね。一気に30ページも埋まっちゃった……」

…

まあ将来を期待された魔導師だしな。そりや埋まる。

「で、大丈夫なのか？千里」

「まあ、なんとか」

心臓はバクバクだつたけどな。転送先から自分がいた場所見たら、スター・ライト・ブレイカーが通過していたんだから。

「ヴィータこそ大丈夫なのかよ」

「アタシは大丈夫だ」

……顔を逸らしながら言われても説得力はないぞ。

(舞阪)

(どうかした？シグナム)

(いや、あの金髪の子供はどうだつた？)

……バトルマニアめ。仕方ないから率直な感想を述べた。

(素材だけで言えば最高峰だろ…パワーはシグナムに負けるけど、速さは圧倒的。将来は間違いなくエースだ。…しかし悲しいかな、あいつは性格が戦いに向いてない。仲間がやられて激情するし、不足の事態ににいちいち驚きすぎ。まったく、もつたいないといったらありやしない)

元々ああいう奴らの方が戦いに向いていないんだよな。戦いに立つなら冷静であれ……戦場の基本の一つ。

正義の味方気取りはいつか自分を滅ぼすつてのもかのFateの赤い『兵アーチャーも立証している。

(そうか……貴様も案外甘い奴だと思つがな)

(え、結構殺氣は持つてたけど?)

(あれだけ分析しながら、本氣で戦えるか?)

まあ…アニメを見たという名の未来予知を持つてますから。全部とは行かなくてもある程度は覚えている。

(まあ、いい。戦える時を楽しみにしよう)

その聲音は、心なしか久々の強敵に燃える剣士のようであった。
正直に言つ、ひばりちり受けそつた気がしてならない。

「つ?」

と、そこで僅かに腕に痛みが走った。

見てみると、若干腕が小さい火傷を負つていた。捉えきれなかつた
時に付けられた傷か?

「……なかなかやるじゃないの

いかにチートと言えど、しつかり扱い切れなければただの無駄つて
ことかよ。なら……やってやるさ、この世界を変えるまでになつ!

第5話 激突！～SFAH～（後書き）

千里「最後セリフがクセエよ。つかチートのくせに傷つくるとかダメじゃん。チートは自重しないからチートなんだぜ？」

作者「世の中そんなに甘くないー」

千里「テメエ！？」

作者「ちなみに案外作者はリアル多忙であんまりアニメ知識ないんですよ。チート能力に圧倒的偏りとかあからさま間に合わせネタが出るのはごめんよ。承ください」

千里「バカだろ。フェイト縛った魔法も名前無しだし」

作者「…………反省しています」

千里「それでも読んでくださった方には多大な感謝を致します。本当にありがとうございます」

作者「さて次回は、ついに魔王らとプライベートで遭遇……そして、そこで何を語らうか。もしかしたら千里スペック挟むかも」

千里「え…………。まあ次回も読んでくれよー」

舞阪 千里スペック

作者「と、いうわけで…。今回は主人公スペックを曝そうかと思いま
す。それに連なつて舞阪千里誕生秘話でも」

千里「どうせ大したことないんだろ」

作者 - うつ

千里一でか、王の財宝で武器の真名解放出来ないよな」

作者 - たかじてないじやん
しすれするけど

千里·才子

美女「くつくつくつ…………感謝なさい」

千里「こじつけだな。まあそのおかげで出来ない」とが出来るからいいけど

作者「えー、というわけで、現時点での明かせる主人公一人の設定と能力を公開します」

舞阪千里

身長 132cm

体重 28kg

魔力総量 EX

使用デバイス：現在なし

能力1：宝具生成

古今東西あらゆる宝具の使用と格納が出来る能力。千里が生前見聞きした創作武器一（例えばゲームに出てくる武器や、アニメで扱われる現行兵器のオリジナルカスタム）なども扱えるが、能力を授かつた時点で千里が知識を持たない宝具は格納されていない。

なので、そういう宝具を新たに創作する場合は、能力に比例した魔力が必要。

能力2：魔導師の栄光

宝具生成の魔法版。古今東西あらゆる魔法及びそれに連なる非科学的な事象を己の魔法として記憶し、使役する能力。その目で見た魔法も、どういった効果を現すか等簡単に分かつていれば即興で撃つことも可能。

しかし神の領域を犯す魔法一（死者蘇生など）は使用出来ないし、

術式の設定が前提としてある魔法は術式を設定しなければならない等、それなりに制約はある。

能力3：？？？

見た目：Rewriteの天王寺瑚太朗の瞳をキリッとさせた感じ。
瞳は澄んだ黒。

性格：一言で言えばおおらかで、誰にでも優しく接する。瑚太朗みたいなへらへらした感はない。

ただ、若干正義の味方のような行動を取ることもある。

千里「？？？ってなんだよ」

作者「まだ本編で使つてない能力。使つてないのに公開するのはネタバレ」

千里「さいで。まあ術式うんぬんは面倒だな」

美女「制限をつけるからここまでの能力を『えられたことは分かつて？世界は等しく揺れ幅を許しているけれど、それを超えれば世界は崩壊するのよ？』

千里「…………すいませんでした」

美女「分かればよろしい」

作者「そしてもう一人の主人公、未だ名を明かされない少年の設定
はこちら」

名前：？？　？？

身長：130半ば

体重：30前半

デバイス：非人格の両刃剣

能力：？？？

見た目：ガンダムWのヒイロの瞳を若干柔らかくした感じ。しかし、現在その面影はプロローグでは感じられない。

性格：？？？

千里「謎だらけじゃないか」

美女「彼を見つけなければ.....貴方、死ぬのよ」

千里「契約が違う！！しかもすげえ深刻な顔してるーー」

作者「実は一連の物語に深く関わってきますが、それはまた先の話。
さて、これくらいにして誕生秘話なんだけど……」

千里「うん

作者「言ひのやめた

千里「待てよー喋るんじゃなかつたのかよー!?

作者「いや、喋つたらネタバレになる」

千里「なら言ひなよ……

作者「すいませんでした。ちなみに、こいつの名前…………JR時刻表の路線図眺めていてよさげな駅名を響きで繋ぎ合わせたポンコツネームです。ちなみに舞阪は東海道本線の浜松駅から名古屋より2駅目。千里は高山本線の富山から4駅目です。他にもいろいろ小説書きましたが、キャラクタは大抵駅名やＪＲの特急・急行から拾っています」

千里「ヒーヒー……

作者「職業柄しかたない。さて、次は必ず本編更新いたしますので
こいつ期待!」

作者「……ところで、お気に入りが8件なんだけど。PVもなんか
3500いつてるし」

千里「お前のハナクソみたいな話作りが受けてるんだろ」

作者「読んでくださる方本当にありがとうございます。必ずや完結
させますので……」

第6話 番屋（前書き）

作者「なんかスペックあげたらお気に入りが4件増えたんだが……」

千里「……」

作者「登録していくたれの方、本当にありがとうございます」

第6話 署屋

そんなことない、俺はやつぱりハ神家の厄介になっていた。

といつかそろそろ帰らつかとしたら、はやてに待つたをかけられてしまつた。

「だめやだめやー千里くんはもつつかうの家族同然なんやーそれで
も帰るんゆーなら…………シグナムとシャマルにー（性的な意味で）
酷い事する」

「お願い千里くん。私、はやてちゃんがそつちの道に墮ちるのを見
たくないの」

「私からも頼む…………もつじまじへりへ住んでくれ」

……なんて頼まれたら残らざるを得ない。とはいって、俺もなんだ
かんだで八神家の暮らしにすっかり馴染んでしまつていたりする。

思えば仮染めの家庭とはいって、ここは温かだ。今更あの一人暮らし
はちょっと出来そうにならないな……。

が、今日は違つ。

はやは定期通院の日でない。

シャマルはもちろん付き添いで、ヴィータはザフィーラの散歩。つ
かザフィーラよ…………お前普通に犬みたいな暮らししていいのか？

そしてシグナムは剣道の非常勤講師に出掛けた。

つまるところ、今日は守護騎士業がお休み。

俺が起きるのが一番遅かつたらしく、起きた時には朝ごはんとはやての書き置きが残されていた。

テレビを付けながら、はやてが残した朝ごはんを食べる。今日も日常と変わらぬコースをしていた。

「……………ヒマ」

今日ほど暇を持て余した日はないな…………。大概この家には誰かいだし、なにか暇を潰す道具もない。

……………よし。

「翠屋に行ってみるか」

かの魔王を有する戦闘一家高町家の経営する喫茶店。魔王とエンカウンターするかもしれないけど、暇潰しとお土産を兼ねて訪れてみよう。

幸い、翠屋は簡単に見つけられた。この海鳴市ではそれなりに有名な喫茶店らしいから。

訪れると、その入口では一人の三つ編みの女性が掃除していた。

「あらこりっしゃい。寄つてくの？」

彼女は高町美由紀。小太刀一刀流を使つんだっけか……この世界でそうなのかは知らない。

知らない…………けど、あの女の事だ。間違いなくどうハトリリなの設定がごちゃになつてる筈。

「……どうしたの？私を見て固まつたやつて」

「い、いえ」

「変な子。せつ、入つて」

そつやつて案内されるままに翠屋の玄関をくぐると、そこにはなのはの母親桃子さんとなのは、通称…………

「魔王…………」

「ふえ！？私魔王じやないよーーー？」

あ、声に出でいたか。つか生で見た桃子さん若すきる。いくつだあの人。

「いらっしゃい！初めてのお客さんね？」

「ええ、まあ」

「わづ…今日は何頼む？メニューはこれよ」

しかも凄く若々しい振る舞い…なんとなく若々しい理由がわかる気がする。

メニューはありふれた喫茶店だった。ソフトドリンクやコーヒー、簡単な一品料理に洋菓子が並ぶ普通な品揃え。

「じゃあカフュオレとショークリーム二つ。後持ち帰りでショーケリーム一箱」

「はあい、ちょっと待っててね」

そうして桃子さんはキッチンに消えた。なんかそこから軽やかな鼻歌が聞こえてくる…………。

美由紀さんもいつの間にか店前の掃除に戻つたらしく、店内にはいなかつた。

「…………」

だから、魔王と二人きり。しかもすじこじガン見していく。

「コイツが砲撃で最後に狙つたのは俺だ。間違いなく直撃コースだったのに、なんで避けられたのかみたいな？」

あるいははどうして敵がわざわざ敵地に足を踏み込んでくるのかみた
いな感じなんだろうな。

(…………あのっ)

…………なぜ、話しがけてくるのは。

(あの時、フロイトちゃんに戦つた人だよね？…ビリしてあんなこと
するの？)

(…………)

(ねえ、聞いてる…………？)

(…………)

どうでもいいなら答えたいくけど、正直話したくない。
話せばコイツは絶対助けようとしてくるし、なによりこいつらが追
う闇の書に携わる事項だ。

(悪いけど、話したくない)

(でも……もしかしたら私達に出来ることがあるかも知れない。
だから、お話を聞かせて？)

上目遣いでこいつらを見てくるなのは。

……耐えろ、耐えろ俺。この笑顔はフェイクだ。この笑顔は一必殺 O H A N A S H I 聞かせて《スターライトブレイカー》のシークエンスに過ぎない……。

(じゅあ。せめて……お前だけでも……)

(……舞阪千里)

(私は、高町なのはだよ)

(ああ)

知つてるとはさすがに返せなかつたので、適当に返しておいた。すると、カラソカラソと翠屋の扉が開く。

「やつほー、なのは」

「なのは、来ちやつた」

「おじやまします」

「フロイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん!」

「つてなんであたしより先にフロイトが出てくるのー?」

「ふええ!?

「あ、アリサ~」

「アリサちゃん落ち着いて……」

誰かと思えばアリサとフロイトとすずかだ。

なのはも俺の近くを離れてアリサ達の元へ駆け寄つた。

と、同時に桃子さんがカフェオレとショーキームを持ってきてくれる。

「はー、ショーキームとかフェオレ。召し上がる

「ありがとウマです」

「……………」
「……………」

「……………」
「……………」

「……………」
「……………」

な……………なんなんだ、一体。このあたりやかなシューの食感に甘すぎないクリーム。
しかもかじった時にビザッと出るクリームがあまりない。こいつはまさしく

「スイート」（笑）なんて付けさせないわよッ！……つたあああ

ああつつっ――――――

「――アリサちやん――？」

痛つつつてええええ――――テメツ、ビ――からハリセン出しやがった
――つかなんで展開が読めるんだ！？サイコマントイストか貴様ツ――

「ビ――その縁のキモオタニートは大嫌いのよ」

今にも殺さんと言わんばかりの眼光を携えたアリサ。

やべえ後ろに仁王が見える。

（千里くん、大丈夫…………？）

（ああ……魔王の砲撃並に痛かった…………）

（だから私は魔王じゃないよ――じゃなくて……アリサちやん――）

（いな）

レンジジャイツテアニメがあるんだけど、それが下ネタばかりで大嫌い

(…………絶対深夜アニメだろ。つかなんでお前も知ってるんだよ)
(それは…………アリサちゃんが見たかったテレビと間違えて録画を
れたやつで……)

(あ、ああー……)

確かにあれは小学三年生には刺激が強すぎる。つか他作品ネタが多くて、一音満載な話もあつたな……。

実在するアニメではありません。

「で？ 辞世の句は読めたの？」

「申し訳ございませんでした」

くつそう
俺被害者なのに。

「... といふのどこのつ誰?」

シハいてから詰うなッ!!」

「普通が前から出来て、」
「あ？」　舞阪千里

ダメだ。アリサが怖い。

「ふうん、千里ね。あたしはアリサ・バーニングス。こっちの紫の髪の子が月村すずか。こっちの金髪の子がフェイド・テスター口ッサよ」

「よのしへ、すずか」

「うひひひ」

すずかはにじやかな挨拶をする。が、フロイトは仮面で俺を睨んでいる。

まあ睨むよなー、メツコメコしたし。下手に聞かれるのも嫌だから戻れと帰らへ。

「じゃあ、もう帰るわ

「え、もう帰るの?」

「家族が待ってるし。あ、桃子さんシュークリームお願いしまさ

「はーい はい、シュークリーム」

桃子さんからシュークリームを受け取ると足早に翠園を出ようとした。

(千里くん!)

(どうしたよ)

(あの……また戦うことになるのかな?)

(……だらつな)

(そつか……でも)

(大丈夫。こじりや何もしないしする理由がない。だけど、お互
バリアジャケット着たら……敵同士だからな)

(うん……お話、必ず聞かせてもらいつの)

(ま、頑張りな)

そこで、俺は念話を切つた。

このシュークリーム。あいつら喜ぶかな。

- S i d e n a n o h a -

千里くんが帰った後、私はちょっとぼーっとしていた。

(次会えば、敵同士)

少しくらい話してくれてもいいのに……全然お話を聞かせてくれなかつたの。

(なのは)

(何? フェイントちゃん)

(の人、この間の人だよね。なんか話聞けた?)

(それが、あんまり話してくれなかつたの。詳しいことは教えられないって)

(そつか……でも、絶対聞かなきやね)

(うん……そつだね。千里くんも聞きたかつたら俺を倒せって言つてたし)

千里くんはきつと嘘を言わない。

ようし、絶対絶対ぜえええつたい！千里くんからお話を聞くために倒すの…！

- Side senri -

「うわあ、めぢやくめぢや廿二なあ」

「ホントだ。一体じいで買ったんだよ千里」

「悪魔の家の喫茶店」

「悪魔？」

「「「ああー…」「」」

はやては？マークを浮かべたが、他の守護騎士にはバッヂ通り通じた。

(つーことは高町ナントカに会ったのかよ)

(ああ。大丈夫、闇の書については話してない)

(なりここナビム.....)

念話で物騒な会話。

でも、あのシグナムですら嬉しそうにショークリームを頬張ついていたんだ。

たまには買に行ってやううつと俺は思った。

第6話 翠屋（後書き）

作者「はい、第6話でした」

千里「なあミディレンジヤイって…………」

作者「私が携帯小説で一番爆笑したギャグ小説だよ。ヤホーでググつたら出るかもね」

千里「まあ人の作品だからおおっぴらに言えないけどな。さて、次の話はどういくんだ？」

作者「そうだなあ…………カートリッジを搭載したのはうと再線かな。後は……ふふふ」

千里「なんだよ不気味な笑いは」

作者「ふふふ。では読んでくださった方には多大な感謝を。また次回も読んでくださいね！」

第7話 なかなか進まねえ。onz

あぐる曰。

今日は蒐集の仕事があるシャマルに代わってはやてと買い物に来ていた。

もちろん、シャマルは上手にことじまかしたが。

「えへへー、千里くんと買い物やー」

「嬉しそうだな、はやて」

「もちろんやー！だつて初めての男の子とお出かけやし、千里くんと外おるんは初めて会^おった時以来やん？」

まあ喜んでもらえてなこみり、なんだけじ。それはつまり逢い引きとこうやつで……。隣にいる女の子は、

「ん？私の顔になんかついてる？」

将来機動六課隊長になる八神はやさんです。

二次創作で変態扱いされるわ莫大な魔力を携えているのに能力柄なフロイの影に隠れてしまふ悲運の女の子。

けど……ショートヘアにおおらかで着飾らない性格が可愛いんだよ。こんな女子に好意を持たれるってこんな嬉しいことって痛い痛い！誰だよ石投げた奴！！

「いや、なんでもないよ」

「うーん？変なの」

見とれていたなんて言えないから。

「で、どこ行くんだよ」

「んーとな、ジャス「ヤ」や」

おい誰だ某書き換える物語のパクリとか言つたやつ。ショーガないだろ、マイナスイオンだかなんだかグループに近い響きの単語つて限られるじゃん？JRがNRとかSRとかに変わると同じ。マガジンがマガニヤンになると一緒なんだよ。

分かる？いくら大衆に晒されたものでも使つたらキヤンキヤン言つ連中もいるんだよ？実際某書き換える物語で飲食店店主が捕まつてたじゃん。

そういう響きをあてがうのって大変なんだよ。特にね、ラブコメが大変なんだよいちいち考えるのがわ。

そういう都合主義な部分に物申す、作家達の苦惱が分からぬ奴には腰を据えて問い合わせたい！小一時間問い合わせたい！！

だからさ、やうこつのは無しでいい。ね？世の中には気にしたらダメなこともあるんだから。

「つて何作者の気持ちを代弁せにやならんのだああああツツツ！」

「千里くんが狂た！？千里くんみんな見とるで！…なんか子連れのお母さんが痛い子見る田で見とつよ！？」

「クハハハハハハ！？兎タヌがれ！兎がれえ！？」

「千里くうううんつ……だめえええ…！」

少年鎮静中

「…………」「めんはやて」

「大丈夫、大丈夫や…私は千里くんが元に戻つただけでも幸せや…

……」

あれから10分くらい暴走していたらしい。

その様子ははやて曰く、『世の中には知らんほうが幸せゆう時もあるねん』とのこと。

何したし俺。つか、よく魔法とか使わずにいたなあ……。あの女に聞いてみるか。

「さて、こんなもんかな?」

多少いざいざがあつたけど、ジャスコで求めるものをしつかり買い込んだ俺達は帰り道をはやての車イスを押しながら歩いていた。

「いやあなんか異様に疲れたなあ……」

「 そ う だ な 」

とてもとても疲れたので、その辺りのベンチで休むこと。俺は座つて、そのままにほやでが車いすを寄せてはあー、とため息をついていると。

なんなんだこの間の抜ける声は！と突っ込みたくないような焼き芋の屋台が田の前を歩いてきた。うぜえ。。。けど、いいにおいを醸し出しているんだよ、マジで。

「ええ匂いやな・・・食べてく?」

「やうしおつか。ちょっと肌寒いし。おじさん、焼き芋一つ

「あいよ、彼女と半分こかい？」

「彼女じゃないですけどね」

茶化すおじやんを軽くあしらひて芋を吸け取り、はやてのところまでそれを持つてくる。田の前で半分に割つてあげて、はやてに手渡した。

「あ、あつ・・・」

「大丈夫か？」

「う、うんなんとか」

せつして一人並んで焼き芋を食べる。・・・やべ、つまー。

「ほわあ、アツアツでつまいなあ。買つてよかつたね?」

「ああ、せうだな」

はやてもすゞく嬉しそうな表情を浮かべる。その笑顔はとても輝いていて。

「・・・・・・・」

「ど、どしたん?顔赤いで?」

「夕焼けが反射しただけだ」

ふう、何とか誤魔化せた。うん、だつて本人を前に見とれたとか言えないじゃん。

「そ、そつそと帰るつ。そつとみんな心配してこる

「せやね。じや、かえろつか」

「ああ」

(おい、舞阪)

(つてなんだよシグナム)

平和に一日終わるかと思つたらシグナムからの念話。なにもこんな時に蒐集はじめなくともいいじゃないかと思つていたら何かしら違う雰囲気を感じ取つた。

(すまない・・・ザフイーラとヴィータが捕まつた)

「よし、ちよつと遠回りして帰るかやで」

「え?ええのん?」

(おこ・・・なぜそこ)主はやてとの団欒を選ぶ。その判断は微

笑ましいが一応こちらが優先事項だ（わーってるよ。はやて送つたら適当に理由つけて合流するから待つてくれ）

（ああ、頼んだぞ）

「……で？ ヴィータとザフィーラが捕まつたって？」

「ああ、やはりのびのびとは羽を伸ばせないらしい」

「こ」は結界が敷かれた上空。 「こ」に、ヴィータとザフィーラが捕まつてゐらし^こ。

「さて、破るか。魔力がもつたいないから俺がやるよ

「ああ、任せたぞ」

そつとシグナムは若干後ろに下がつた。その前に。

「これを覆つように結界張れるか？」

「まあ、張れるが……どうしたんだ？」

「せつかくだから魔法で派手にぶち破る

「……まったく」

そう言ってシグナムは一回り大きい結界を張つた。確認して、呪文の詠唱に入る。

——フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ。

契約により我に従え高殿の王。

来たれ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆、百重千重となりて走れよ——

「——千の雷！——」
キーリブル・アストラベー

ズガガガガガガガガガガガツツツツ！——！

ネギ親子の最も得意とする雷系最強クラスの古代語呪文、千の雷。約10秒に渡つて降り注いだ雷は中の結界を壊すには十分だった。

「よし、うまくいった」

「もはや何でもアリだな、貴様」

「まあまあ。さっせと行こ」

しかし、この能力すごいな……魔術師の榮光。ハイエンショント
マジシャン・オブ・グローリー本当に何でも使える。

さて、なのフェイは強くなつたかな。

煙に包まれた結界を抜けるとそこにはヴィータとザフィーラがいた。が、なんか様子がおかしい。

「……あの雷はお前の仕業か」

「え、ここまで聞こえたのか！？」

「おかげさまであ……！」

「ちよまで、アイゼンのラケーテンハンマーで殴るひとするのはやめろー！」

「待て、ヴィータ。そいつに報復をするのはあとにしり」

そう言つてシグナムはレヴァンティンの鞘から剣を抜いた。その視線の先には。

「時空管理局本局執務官、クロノ・ハラオウンだ。少し話を聞かせていただきたい」

クロノがいた。後ろにはなのはとフュイトがカートリッジシステムを携えたデバイスを構えている。

「断ると言えば？」

「力ずくにでも」

「だと。どうするよ」

「「「もちろん逃げる」「」」

「だつて。なら、俺はその手助けをしますかね」

「させない」

そう言つて、クロノはデバイスをこちらに向けた。

「無駄無駄。俺にかなうはずないって

「な・・・子供のくせに」

「何言つてんの、君も子供じゃん」

「僕は君より5歳年上だ！」

「やれやれ・・・熱くなつちやつて」

そんなこんなでシグナム達は転送の準備をしていた。ただ、ヴィータは若干心配そうだ。

「心配か？俺が」

「そんなんじやねーよ。負けたらぶつ飛ばすかんな」

その言葉を最後に、ヴィータの声は聞こえなくなる。・・・よし、舞台は整つた。

つてなのはクロノのセリフにかぶせてやんなよ！心なしかクロノが
切なそうだぞ！

「くつ、『熾天覆う七つの円環』！」

とつさに展開したアイアスで砲撃を防ぐ。投擲・射撃に強いこの盾なら十分に防いでくれるだろう・・・

「ハアアアケン、セイバアアアア！」

その背後からフェイトがゼロ距離ハーケンを叩き込んでくる。体をひねつて回避した俺は両腕に干将・莫耶を展開した。

「それはあの時の！」

「ああ、あの時の双剣さ。名前は干将と莫耶」

フェイトと熾烈なアサルトを仕掛けながらそんなことをしゃべる。

「それが、あなたのデバイスなの！？」

「なわけあるか。デバイスなんかねーっとおーー！」

やばいやばい。フェイトに気を取られていたら、なのはのアクセルが襲いかかってきた。ついでにクロノのステインガースナイプがやつてきている。

くくっ、確かに1対3はきつい。けど、俺にはこの力があるーー！
俺は飛翔しながら、魔法を詠唱する。

「フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ！光の精霊101柱、集
い来たりて敵を討て！セリエス・ルキス魔法の射手連弾・101矢！！」

なのは達の魔力弾をはるかに超える101の魔力弾。全部相殺させてもこれは防ぎきれまい。

「な、なんなんだこの桁違いの数は！？」
「はー！これぐらいで驚いてるんじゃねえよーー！」

せうに詠唱。そして莫耶を戻してからクロノに左手を向けた。

「ライトニングバインドーー！」

「く、うわあーー！」

「クロノ君ーー！」

「クロノ！？ってあれば私のーー！」

「補足しておくと君の妹より強度があるからな」

「く・・・くそつ・・・ーー！」

くくく、悔しいだろうなあクロノ。なんせ義理の妹の前で醜態をさらしたもんなあ。あとは一人。

「はああああああああ！」

「五二」

至近距離からの「ブリッジ」に一瞬捕らえられなくなるが、目が慣れた
らしきものの。若干攻撃も直線的。「アクセルショーター」、シュー
ートー！」ですよね。なのはさんフリーだもんね。

めんざくせえ！！！一気に力タをつける！！！

「来い、焰竜凰剣レヴァンティン！！」

干将・莫耶を戻してシグナムのそれとは違う、もちろん宝具のレヴァンティンとも違う・・・・魔界の魔剣を呼び出した。そして、そのむやみに放出されている黒い炎を練り上げて、自分の頭上にかき集めた。

「炎凰、爆碎！！炎天魔陣！！！」

そのまま、レヴァンティンを振りおろした。そこから放たれる二回月状の炎。

「……死んでないよな?」

むしゃくしゃして思い切りやつちまつた感があるけど……。心臓ばくばくで爆発先を見やつたらなんとか生きていたらしく。が、その足元には10発分のカートリッジが。

「フエイトちゃん!」

「な、なのはは大丈夫……?」

「フエイトちゃん!」そ大丈夫なの!?

「わ、私は、だい、じょつ……」

そこで、フエイトは気を失った。ちょっと火傷しているのが非常にいたたまれない……。『めんよフエイト。

ちなみにクロノは爆風でじつかに吹っ飛んでいた。

「さ、あとはなのは。君だけだ

「つ……でも、私はあなたからお話を聞きたい」

はあ、やつぱり頑固だな。びつてしままでできるんだら。

「なあ、びつてしまで躍起になつて話を聞くつとしつこるんだ?
?」

「だつて、それは……きつとびつとも事情があつてこいつこいつとしてるんだと思ひ。それを真つ向から否定するのはおかしいこと思つて」

「え……9歳なのに、こんなしつかりとした考えがあるんだな。

「それを聞けば、あいつみんなが傷つかない方法がきっと見つかると思ひの…だから、お話を聞かせて？」

でも、甘ちやんで頑固なのは変わらないと。・・・やれやれ、仕方ない。

「悪いけど、話はできない。ナビ、なのならが迫つてこる事件について、ヒントつか、みんなのこの状況を一言で表してやる」「うん・・・」

「最初になのは言つたな？あいつみんなは事情があつてこいつをしてるつて。それは正解。みんな自分の目的がある・・・もしかりん、俺も。そして・・・それは愛するものためこそ」

「え、それってどうこう――――――」

「閃光《flash》」

「え、あやーーー?」

そこまで話して、さく裂魔法で田へりましをさせて逃げた。・・・
俺つて、アマちやん?

第7話 なかなか進まねえ〇ーん（後書き）

千里「なんで始動キーがタ映？」

作者「千里に似合いそつだつたから」

千里「さいで」

作者「しかし……話がすすまないね……」

千里「そもそもA-sがつる覚えだしな。しかもWikι見たら意外な内容の濃さで執筆が停滞しそうなんだろ」

作者「停滞はしないけど……書くのは遅れそう……」

千里「なのはファンに謝れ

作者「調子についてすいませんでした〇ーん」

千里「つか、魔剣ってなに？」

作者「ひと昔にはまつた携帯ゲームに出てきた剣。けつこうつかっこいいから」

千里「厨二全快だつたけどな……」

作者「まあまあ。さて次回はナツリツ飛ばして闇の書覚醒ぐらごまで飛ばすか」

千里「がばつとせしょつたな」

作者「い」都合主義です」

千里「・・・とまあ、『なんなぐだぐだですが、これかひむか』愛読いただけれどと思います」

第8話 クリスマス・イブ

- side ??? -

ここはある管理局の執務室。そこには一人の老人が、何かの事件書類に目を通していた。

この老人こゝう見ても提督服を身に纏っている。その姿を見ればなるほど、貫録のある姿をしている。

その男はギル・グレアムである。11年前、前の主を持っていた闇の書を一時消滅させた英雄の一人。

そこに自身の使い魔の一匹が執務室に入ってきた。

「父様・・・・」

「ああ、どうしたんだリーゼ」

「闇の書の蒐集ページが600ページを超えた模様です」

「そうか・・・もうすぐ復活がなされるというのか」

グレアムはなにか杞憂を持った表情で外を見る。

それもそのはず、この男は11年前の事件でひとりの友を犠牲にした。そして、それをその友の妻には罪悪感を抱いていた。・・・・そして、今現在も。

「すまない・・・本当にすまない・・・」

そこから先の言葉は声にならない。苦悩に揺れる老提督の机には嬉しそうに守護騎士と戯れるはやてと、千里の写真が同梱されていた手紙があつた。

- Side nanoha -

「うーん……」

「どうしたの？なのは……真剣に考え込んで」

「うん……ちょっとね」

戦いが終わってから、私は千里くんが口にした言葉の意味を考えていた。

——それは、愛するもののために。

私は……ユーノくんやフュードライバーちゃんやリンティちゃんにクロノくん…时空管理局でお世話になつた人達のために頑張つてゐる。なにより、魔法は……誰かを幸せにするためにあると思つてゐるから、魔法も大好きだ。

じゃあ守護騎士さん達にとつての愛するものって？

仲間？確かに合つてゐるけど、何處か違つ。

闇の書？いや、これはあくまで自分の大元だってクロノくん言ってたし。よく分かんないや。

じゃあ……「ご主人様なのかな。

きっと、守護騎士さん達のご主人様がいい人だから。

守りたい人だから。あるいは……「ご主人様が闇の書の完成を望んだから。

きっと、戦つてるのかな。だけど、それじゃ迷惑をかけちゃうから

だから、話し合って分かりあつて、手を取り合わなきゃ。

「でももうすぐ闇の書が復活する時期なんだってクロノが言つてた。
だから、気を引き締めなきや」

「そうだね、フェイトちゃん」

笑顔と勇気。あの子たちに届いたらしいな。

あれからしばらくして、はやてが入院した。理由は話してくれなかつたが、原因は分かつていて。ここにきてさらに闇の書の浸食が進んだのだろう。

それからといふものの、守護騎士たちの蒐集はさらに活発になつていった。俺はシャルのお願いで出来るだけはやてといてほしいといふ事だったので、俺はそれを了承した。理由は簡単、おそらくここに来るであろう、仮面の二人組・・・アリアとロッテをひとつらえるため。

「で、そろそろなんだよな」

今日はクリスマス・イブ。特に道筋を捻じ曲げることはないから、順当にこの日を迎えたことになるな。

ちなみにやはやは今、精密検査を受けている。だからこのやはやの病室で暇を持て余していた……のだが、なんか目の前に魔法陣が浮かび上がり、その中心から俺を転生させた女が投影された。

『お久しぶり。この世界は堪能しているかしら』

「おかげさまで」

『そう。それで、あなた命令は覚えていて?』

「ああ、青く澄んだ瞳の少年だろ? それがどうしたんだよ」

『ええ。その子は今日を乗り切つたら必ず出会うことになるわ』

それなんてクソゲ? いろいろ氣を滅入らせた俺はため息をついた。

『何を考えてるのかしら? あなたがハ神か高町につかなければそれは不可能だったのだから』

「あんな簡単なヒントを出すんじやないよ

『かといってヒントなしは無理でしちゃう?』

た、確かに。

「そういえば、俺の魔力とかってどうなってるんだ?」

『え、ほぼ無尽蔵に等しいけどね』

「……ということは魔力量がカンストしてるのが」

『そんなことはないわ。少なくとも、転生時の能力付帯については術者以上の能力は与えられないから。まあ、今のあなたならよっぽど練りに練った魔力で連続的に大魔法や宝具などの解放しなければ

エンプレイスは先ずないでしょ。そして、それを普通に扱える程度には知識と身体能力は付加をせであるわ』

「だから自分でもびっくりなぐらい慣れた手つきで詠唱とかしていたのか・・・」

いちいち魔法の詠唱とか覚えてないし。なんで千の雷の詠唱がしらふで出たのかずっと気になつてたし。それもこれもこの女のおかげなのか・・・。

「なあ・・・俺に何をさせよつとしているんだ? そろそろ教えてくれてもいいじゃないか」

『それについてはできないわ。いえ、正確には教えてはいけないの』

「はあ?」

『あなた、ツバサ・クローネルという話は知つていて?』

ツバサ・クローネル・・・ああ、サクラの記憶のかけらを集める小狼の物語だ。

「それがどうかしたのか?」

『その中に干渉値という言葉があつたでしょ。それと同じなのよ。干渉値というのは、別次元から直接別次元に何かしらの行為を行う事。私がそこに現界して話せば済む話だけど・・・あいにくそれができないのよ』

「なるほど」

『ま・・・まずはこれから起ることをひとつにかしなさいね。応援しているから』

「え、あ、おい!!」

なにか言つてやろうと思つたが、その前に魔法陣が消えた。
・・・・・うん、トイレに行くか。

「…………はつ？」

あれ、俺寝てたのか？しかもここにビニーへ
辺りを見渡す。そこは病院の一階ロビー。そこのソファで寝てい
た。

「いつの間に寝てたんだ……？しかもその間のことも思い出せな
いし」

トイレで用を足してからの方がぜんぜん思い出せない。俺……
なんで？つか、どうして病院に？
ダメだ……なんかもやがかったように思い出せない。えーっと、
なんかを阻止するために……。

『あ・・・わあああああああああつひとつ……！』

「つひとつ……？」

その声……はやて…さうだ、思い出した！俺は……はやてを守
るためにここにいた！

でもなぜ？なぜ思い出せなかつた！？そんな俺の脳裏に浮かぶのは
・・突然田の前に現れた仮面の・・・

「へやつ……」

俺としたことがまんまとやられた！あの連中には全部わかつてたのか！俺が一番の障害になることを…
だがな・・・。

「俺に喧嘩を売るのは、1000年早いんだよー。」

病院を飛び出して、すぐさま右手に魔力を集束を行う。

「千の雷、固定・・・・・掌握ー！」

マギナ・エベレア
ヘー・アスヤチャヌヌー・ヒヌガベボコナメネー
——雷天大壮ー！

闇の魔法による術式兵装、雷天大壮を展開してすぐさま屋上へ向かう。

そしてそこにいたのは。

「・・・・・せ、んり・・くん・・・？」

今にも闇の書の中に取り込まれそうなはやてがいた。

「はやてえーー！」

俺は我を忘れてはやての元へ走り寄りつとした。が、なにかに弾かれて思い切り吹っ飛ばされる。

「ぐあつーー？」

「ど・・・どうしたんやろ、わたし・・・なんや千里くんが光つて見えるなあ・・・・・」

はやての体には闇の魔力がおおかた取りついている。これを終わらせるにはこいつだ。

「『ルルブレイカ 破戒すべき全ての符』！」

あらゆる魔法・魔術を初期化する最強の対魔術宝具。これを突き立てるべく雷速瞬動ではやてに接近する。しかし、逡巡が俺を襲つた。

これとはやてに突き立てたら確かにやはては助かるだろ？
なら、守護騎士は？こいつを突き立てたら、防衛プログラムである
守護騎士もろとも消える。

その未来を・・・はやはては受け止められるか？俺だけで、何とかで
きるのか？

その逡巡が、命取りだった。

「『めんな・・・私、負けてもうた・・・・』

強烈な魔力の奔流。そのすさまじさのあまり、俺はまた吹っ飛ばされた。なんとか立ち直した俺は、はやはてがいた場所を見た。そこにはいたのは・・・・。

『防衛プログラム起動・・・目標の排除を開始する』
暴走した祝福の風・・・闇の書の意志がいた。

第8話 クリスマス・イブ（後書き）

作者「知らない」とだから……原作が原作になつてないな……」

千里「もはや何も言つまい。というかかなりシリアスだな」

作者「ここのはじめの展開は一番書きたかった。けどかなりじごじつけ感があるかな」

千里「ああ。非常にじごじつけ感があるな」

作者「〇—△」

千里「……絶対、守るからな……はやて」

作者「loveなのか？」

千里「違つわ……」

作者「チツ！――」

千里「なんなんだよお前……」

作者「そりですね……そろそろリクエストとかこないかなあ……」

「

千里「一万年と二千年早い」

作者「〇—△」

千里「さて、こんな奴はほつといて。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。これからも引き続きこのダメ作者の物語にお付き合いで下さい」

作者「次回！－闇の書に染められたはやての力の前に千里は攻めあぐねる！そこに助け舟を出すなのはトフエイト！彼らははやてと闇の書を切り離すことはできるのか！？」

第9話 死闘！！祝福の風

「はやて……？」

意味がないとわかっている。けど、呼びかけにはいられなかつた。

「刃^も以て、血に染めよ。穿^うがて、ブラッディダガー！」

が、返事を攻撃魔法で返された。すぐさま雷速瞬動で距離を取つて、両手に魔力を集束する。

——エンシス・エクセクエンス
断罪の剣！！

熱量の相転移による切断・物質の昇華を引き起こす、エヴァンジェリンの十八番。その魔力刃で襲い掛かってくるダガーを切り落つていぐ。そのまま、雷速瞬動で眼前に迫つた。

「だあ！」

左腕を袈裟懸けに振り下ろす。が、闇の書の魔法障壁で完全に防がれる。

「ちっ！無駄に硬くなりやがつて！」

ここで、闇の書の意志も構えを取つた。クイックムーブで近づいて蹴りを放つて来たけど、雷天大壯を展開した俺にはまず触れられない。

(とはいえる、こいつらも攻め手に困つてるんだよな)

あちらは攻撃は当たらない。逆にこちらは攻撃が通じない。
本音は、魔法だけで倒したい。宝具……デュランダルなら間違いなくあの障壁は貫ける。けど、あいつに飲み込まれる可能性がある。

「ち…っ、ビッシュリってんだよーー！」

すると、上空から桜色と黄色の魔力弾がそこらに降り注いだ。まあ闇の書の意思はなんくるないさーと言わんばかりに防いだ。

「大丈夫ですか……って千里くん！？」

「君は……」

「なのは、フェイト！お前らビニにー？」

「それが、よく分からぬ仮面の人にバインド食らつちやつて…」「私も、似たようなものだよ」

ああ、アリアとロッテにやられたのか。つかあいつらの仮面にはどんな細工があるのやら…本人よりも強い気がする。

「それよりもあれはー!?」

「闇の書が強引に覚醒させられたんだよーー。シグナムラもはやてもあん中だーー！」

「でも君も蒐集を……」

「わけあって協力してたんだよ。なのはにはヒントやつたはずなんだけどな」

「え、なのは……聞いてないよ」

「あんなのヒントなんて言わないよーー！」

等と口論していたら、再び魔力の集束を感じる。

闇の書の意思のほうを見遣ると、そいつの頭上には「アボリックエミッションに相違ない魔力壊があつた。

あれが炸裂したらもれなく電車あの世へでGOーですね分かります。

「つてそんなバカなこと言つてる暇はない！！」

「え、わわっ！？」

「きやつ！！」

俺はフェイトとなのはのバリアジャケットを引っ掴むと、雷速瞬動で攻撃範囲外にまで移動した。その直後、黒い魔力塊が爆ぜる。俺が言うのもなんだが規格外の攻撃力だな・・・こんなのが暴れたら普通に地球なんか崩壊するだろうな。

「それで、君が守護騎士じゃないなら・・・手伝ってくれるの？」

「当たり前だ！俺の不注意がなかつたら防げたかもしれないんだ・・・俺がやらなくて誰がやるんだよ！..」

本当にふがいなかつた。わかつてたのに、そのためにはやての傍にいたのに・・・こんなことつてあるかよ！..

「とにかく、あいつトリインフォースを切り離さないと。まずは^{管制人格}やての意識を覚醒させて・・・」

「えつと・・・なんでそんなこと知つてるの？」

「あ？そんなもんお前らが捕まつてる間に見抜いたに決まつてるだろうが」

「えと・・・す、すごいね？」

実際はアニメ見たから。とはいって、一応相手の能力・状態をあぶりだす魔法ライブラで照らし合わせたけどな。

「お前信用していないだろ」

「んな」と言つてる間にあいつは魔力をまた集束してるんだよな。
そう、なのはの十八番の殺人砲撃スターライトブレイカーを。

「あれ、スター・ライト・ブレイカー！？」

「嘘！？なのはの魔力を取り込んでるから！？」

「ンなことより、周りを見たほうがいいんじゃないかな？なんかお前らの友達っぽい反応を見つけたんだけど」

「ええ！？あ、ほんとだアリサちゃんとすずかちやん！？」

俺はまたなのはとフェイドを抱え、雷速瞬動でアリサラの田の前に移動する。

いきなり田の前にコスプレしたのは&フェイド、そして光る男が現れたら引くどころか幻覚を見たとか思い込むだろつな。

「悲しいけどここから、本物なのよねー」

「分かつてるとわよー！えーっと……」

「ほう、俺の名前は覚えてないと」

「冗談、千里よね？で、このコスプレって何？」

あれ、こいつらそんな冷静だつたかな？

「え、驚かないんだ？こんなアイタタタな格好しててのに

「「悪かったね！」」

「いや、なんか驚きすぎて一回転して冷静みたいな……ってなわけないでしょ！…説明しなさい！…」

「今はそんな」と言つてる場合じゃないんだよ！後でこいつらに聞け！！」

「「なんで！？」」

ああもういちいち驚くな！－ほら、もつやつこさん発射体制になつてますよ！－

「なのは、フェイト！障壁張つて防いでる！」

「え、でも千里くんは・・・」

「俺はあいつを相殺する！－！」

そつ言つて俺は飛び上がつて右手に魔力を集束させた。直射系魔法なら、こいつだ！－

――フォア・ゾ・クラティカ・ソクラティカ。
来たれ深淵の闇、燃え盛る大剣。
闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焰。
我を焼け彼を焼け 其はただ焼き尽くす者――

「これを、直射にッ！－！」

――奈落の業火！－！
インケンディウム・ゲヘナ

焰の魔法、奈落の業火を直線状に放つ。あちらも同じタイミングでスタートライトブレイカーを発射した。

桜色の奔流と、地獄の炎はお互いのちょうど中点でぶつかり、すさまじい衝撃波が走った。

「きや！－！」

「な、なんて衝撃・・・つ」

俺自身もその衝撃波にさらされるのだが、その辺は何とかなつた。

けど、この衝撃は気を抜けば吹っ飛ばされそうなほど強い。そのまま、奈落の業火はスタートライトブレイカーを打ち負かした。

「す、すごい……スター・ライト・ブレイカーを負かしちゃうなんて……」

魔法は術者の魔力と鍊度に比例して強くなる。俺の魔力なら、中級魔法でもその辺の大魔法と変わらんだろう。

「さて、なのは、フュイト。アリサとすずかを安全な場所に移して
くれないか?」

え、千里くんは？」

俺はここであいを止める

「そりゃ無茶だよ！」

なに、何でるんかよ。今さうきの界隈

卷之三

そう言って、なのはとフロイトはアリサラを抱きかかえてこの空域から離脱した。

「・・・待つてみよ、はやて。俺が・・・必ずお前を助けてやる」

そして、俺はその手に呼び出した両端に刃が付いた正宗を握りながら、雷速瞬動を仕掛けた。

「うん、ここでいいかな」

「やうだね、なのは」

私たちは千里くんに言われたように、アリサちゃんたちを安全なところまで運んできた。アリサちゃんはすく珍しい体験をしたような表情をしていた。

「空を飛んでた・・・本当に、魔法が使えるのね」

「う、うん・・・黙つて！」めんね

「うん、いいんだよなのはちゃん。なのはちゃんが話せなかつたのは理由があるんだよね？」

すずかちゃんは優しい。こんな私たちの姿を見ても、深く入り込んでこよどじしない。アリサちゃんは・・・なにかと頭の中で戦つたけど、やがて決着をつけたみたいで口を開いた。

「それで? アンタ達は千里のところへ帰るの?」

「・・・うん」

「千里くんはああ言つてこたけど、もしかしたら無理してゐかもしない」

「・・・あなたたちが死ぬかもしれないのに?」

うん・・・分かつてる。この戦いが、命を懸けたものだつてことぐらい、こんな私でも分かるよ。とっても怖いけど・・・でも。

「ね、フロイトちゃん」

「そうだね、なのは」

「・・・むー、また一人だけで分かりあつて〜

「するこよ、一人とも。私たちにも教えて?」

あはは、ごめんね二人とも。そう心の中で謝つて、フェイトちゃんに田くばせした。フェイトちゃんは頷いて、飛行魔法を発動させるついで、私もフライヤーフィンを起動させた。

「ま、待ちなさい！！」

「『めんね、アリサ。だけど……』

私たちは、声をそろえてこう言つた。

「「友達を助けるのに、理由なんかいらない！！」」

私たちは急いだ。はやてちゃんを助けるために一人残つた、千里くんの元へ。

「全力、全開！！」

「闇に染まれ、ブラッディダガー」
〔ディオス・テュコス〕

「雷の斧！！」

リインフォースのブラッディダガーを雷の斧で一気に切り払う。そして背後に回り込むとマサムネをバトンのようにまわしながら斬りつける。が、それは障壁で防がれ、リインフォースの裏拳が飛んできた。

(背後からも防がれた！！注視してみてもどっこいその始まりの使徒みたいな曼荼羅みたいな障壁を張つてゐる様子はない・・・なら、フィールド系の障壁か)

雷速瞬動で躱しながら、冷静に分析する。つか、マサムネで斬れないと。あの正宗とは違つけど一応異能の刀だぞ。

「・・・魔法の射手・闇の連弾199矢」

つてあれは俺の！－つか本編全然関係ない！なんであいつが・・・

-回想-

「あ、そうだ。お前のリンカー『ア食わせさせ』

「え？ああ・・・そういえば言つたっけか。つか出し方わからないんだけど」

「・・・」

「なぜそこで可哀想な人を見るような目で見る」

「しようがないですね。千里くん、私の旅の鏡で取り出しますね」

「・・・申し訳ない」

ああそうでしたね！－俺の魔力も蒐集してたんでしたよね！－

なんでもんじくさい」とこを蒐集してんだよ闇の書。いや、シャマルの旅の鏡か・・・。

「つてんなこと言つてる場合じゃない！！」

マサムネをバトンのようにまわして魔法の射手を防いだ。とある世界では盗賊刀と揶揄されるこの類の刀の長所なんだよな、この攻防一体の行為ができるのは。

「たかが200ぐらいで倒せると思うな！」

対してこちらは五倍の1001の雷の魔法の射手を展開した。そして、目標は全弾リインフォース。

「まだだ！！戻れ、マサムネ。来い、エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」

そして太陽の力の恩恵を受けた聖剣、エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣を呼び出した。

なんで本家じゃないかって？そりやエクスカリバーはいろいろな人が握るしさ？

「はああああああああ！－」

魔力の集束。そして解放。

「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣！－」

剣先から放たれる焰の一撃はリインフォースをいとも簡単に飲み込む。あの焰を受けてまさかなあ・・・と思ったが、やはり防がれていた。

「こりまでやつて無理なら、やつぱりデコランダルか？いや、俺が取り込まれたらまず勝ち目がない。なんせ俺の魔法を使うんだ……」この分なら、千の雷や燃える天空ウーラニア・フロゴーシスを使ってきても不思議じゃない。なんとかできないか。そんなことを考えていたら、上空から桜色の砲撃がリインフォースに直撃した。

「大丈夫、千里くん！？」

「ああ……さすが魔王、問答無用だな」

「だから魔王じゃなって……・・・・・悪魔とは、ヴィータちゃんの前で認めちゃつたけど」

しゅんと、ツインテールと一緒に垂れ下がるなのは。こいつのツインテールはあほ毛キャラのあほ毛と同じ性能を持つてるのか？

「サンダアアア、レイジー！」

追撃と言わんばかりに雷撃を叩き込むフェイト。ちょっと効いたのか、リインフォースが若干よろけた。

そしてフェイトは俺となのはの元に寄つて来る。

「・・・えぐいな」

「なにを言つてるんですか。あなたのさつきの魔力弾の数のほうが異常です」

「ですよねー。」

「・・・見えたのか？」

「まあ、あれだけ浮いていたら・・・・ねえ？」

「そうだね、なのは」

ネギとほほ同じくらいの量を展開したしな。その間に、ユーノとアルフがやってきた。

「なのは！」

「フェイトーってなんでアンタがここにいるんだい？」

はいはい、睨むなアルフ。

「あれを止めるためだよ」

「ふん、どうだか」

「大丈夫だよ、アルフ。この人も協力してくれるから」

俺が言つたら全然なのに、フェイトの一言で全面信用かよ。泣くぞ畜生。

「そういえば・・・結界張つてるのか？」

「え？」

「え？ ジヤねえよ。このまま暴れてたらこの街が大惨事だぞ」

「嘘！？」

『嘘じやないわ。結界がまだ張られてないの』

この声・・・リンディ・ハラオウンか。アニメ見てたときも思ったけど若い。

永遠の17歳と言つても十分だませる。

『そこの君』

「はい」

『この戦いが終わつたら、全部話してもいい』とになるけど・・・かまわないわね？』

「無論。確認だけど、結界以外は大丈夫なのか？」

『ええ、認識阻害は大丈夫よ。ただ、なのはちゃんの友達について
はもうどうしようもないけど』

「そのへんはなのはとフェイトがなんとかしますので」

なんか視線が痛いけど、気にしない。

「よし、というわけだから手伝えみんな」

「・・・それが人にものを頼む態度かい？」

ほつといてほしい。

「あいつは今危険対象を優先的に攻撃してくる。だからなるべく派
手な魔法で人気のないとここまで誘つ」

「ど、どうやつて？」

「俺がなるべくインファイトで惹きつける。一人は射撃魔法でうま
く誘導してくれ」

「ええ？でも君が・・・」

「心配するなつて」

俺は転輪する勝利の剣を拈ぎ直してこうこう言つた。

「この剣は勝利を約束してくれるからな。だから、絶対大丈夫だ！
！」

第9話 死闘！！祝福の風（後書き）

作者「だあああああ……もうこや…」

千里「どうしたんだ…？」

作者「今田もすじに黙文。」

千里「やつで」

作者「8話の最後決まったのにな・・・」

千里「まあ、あの切り方は良かつたな」

作者「なのにこの話と来たら・・・」

千里「とはいっても嬉しかったです。誰かは存じませんがありが
つたじゃないか」

作者「それはとっても嬉しかったです。誰かは存じませんがありが
とうござります。そしてなんか連日PVが1000を超えてるんだ
けど」

千里「まじか！こんなダメ小説に！？」

作者「うん。一応読んでくれてる人がいるし、これからも執筆頑張
ります。そしていい作品を作つて、こうと思いつますのでどうぞよろ
しくお願いします」

千里「で、次回は」

作者「とつとと対祝福の風を終わらせる」

千里「すごい投げやり！？・・まあいいや、次回も読んでくださいね」

第10話 Silent Bible

前回までのあらすじ。

俺、眠られる。闇の書覚醒を止められない。

戦う。リンが超チート。アリサとすずかに魔法がバレるなのフュイ。

リンディさんに事件終了後O H A N A S H Iがあるとか言われる。

なのフュイが手伝つから、とりあえず結界張つてないとこから広いところおびき出してリンチしようぜ?みたいな。

で、おびき出した。大成功、やったね

だけれども。

「ねえ、全然攻撃が通らないよー?」
「分かつてるよー!」

今ここ。いろいろ攻撃を加えているが、すべての攻撃をリインフォースに防がれていた。

なんだよあいつの障壁。**絶対防御圏**かなんかなのか！？

……いや、もしかして防御にすべての魔力を回してゐる？
だとしたら非常にやつかいた。

「ねえ、どうするの千里？」

「…まずは、防御を突き崩す」

俺はデュランダルを呼び出す。

え、結局インファイトなのかよ！？とか突つ込むやつもいるだらう。

物理攻撃つてのは遠距離よりも近距離のほうが威力が高い。神厳魔槍グングニルや**大神宣言**^{ケンケーニール}みたいな宝具・魔槍ならそういうのは関係なくなつてくるけど、同じ攻撃力を至近距離で叩き込むのとを比べたら、やはり近距離のほうが強い。

だからこそデュランダル。そして取り込まれる可能性に対する答えも作っている。

雷天大壯で近づき、そのまま上空へ雷速瞬動。

そしてデュランダルに魔力を通した。

……ちなみに、真名解放ではない。

ただ、近距離がだめなら安全圏ギリギリから斬戟を飛ばせばいいだけの話だ。

「破魔・竜王陣！！」

魔を刈るために編み出された、諏訪に伝わる剣技。らせん状に放たれた剣戟は、ラインフォースの障壁にぶつかって爆発した。

見れば、ラインフォースの障壁に少しだけひびが入っている。

「す、すごい……」

「よし、次だ」

ラインフォースは沈黙する。そこで、念話が届く。

(管理局の魔導師さん!)

「はやてちゃん！」

(なのはちゃん！？私、今から管理者権限でプログラムの強制分離行つからーこの子にダメージを負わせてくれる！？)

「はやて！！」

(千里くん！？)

「お前自身は大丈夫なのか！？」

(なんとか！それに・・大丈夫やのーても絶対やるんや！迷惑かけた分・・・今ここで防衛プログラムを切り離すとこで取り返さにや！！）

「ああ、俺たちに任せとけ」

よし、ここからは俺たちの頑張りがすべてを左右する。けど。

「！」の障壁なんだよね

「ああ・・・」

ユーノの言つとおりだ。この障壁をどうにかしないことには・・・。つて、うん？あの龍王陣であれだけなら、もつちょい集束した・・・。

「ユーノ。あの障壁を壊す条件を計算してくれ」

「ええ！？・・・うーん、S+の魔力でバリア貫通か破壊があれば」
「じゃあなんで今までの攻撃通らなかつたんだろ？」

「それは単純魔力ないし単純物理攻撃だつたからじゃないかな」

付加効果の云々でここまで難易度が変わるのは・・・。ただの力押しじゃどうにもならないこともあるんだな、としみじみ感じた。そしてまたデュランダルに魔力を通した。

今度は、あの剣戟をもつと圧縮して・・・真の一撃必殺に！

「破魔・竜王刃！！」

らせん状の竜王陣とは違つて、斬撃を極限まで練りこんだ一対一専用の一撃必殺の剣技。

三田円状のそれはリインフォースのバリアを十分に破壊した。

「くわづ、まだ修復するく「私が行きます！」なのはー！？」

なのはのほうを見やると、すでにA・C・S・ドライバーとストライクフレームを起動させていた。
いつでも零距離殺人砲撃《エクセリオンバスターA・C・S》はいけるよ 的な感じだった。

「でもエクセリオンモードは・・・」

「大丈夫！私とレイジングハートなら…」

「Yes, My master」

「諦める、ユーノ。もうこいつはやる気だぞ」

現時点での突貫力なら、なのはに賭けるしかないだろう。なので、俺はなのはに補助魔法を掛けた。

「なに、これ。力が湧いてくる……」

「フェイスと、マイティガード。まあ、攻撃力・瞬発力強化とその後の爆発対策つてどっこか」

「あ、ありがとう千里くん！」

・・・くつ、そんな満面の笑みを浮かべるな。煩惱にダメージを負わせるな。

とか思っていたら、なのははすでに神風特攻隊ばかりのスピードでリインフォースに突っ込んでいく。

「エクセリオオオオン・・・バスターアアアアーー！」

ずがああああああああああん・・・・

直後、大爆発。むろんなのはは吹っ飛ばされたが、ユーノとアルフがキャッチした。

なのははマイティガードのおかげで無傷。そして向こうは・・・。

リインフォースのいた辺りはなにやら不気味な球体に包まれる。やがてそれは白と黒に分かれ、白いほうには四つの魔法陣が囲むようにして展開した。

『我ら、夜天の主の下に集いし騎士』

『主ある限り、我らの魂尽きる事なし』

『この身に命ある限り、我らは御身の下にあり』

『我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に』

その魔法陣の上に再び、姿を現した4人の守護騎士。そして各自が誓いをはやてがいるであろう白い球体に立てる。すると、その球体が輝きを増したかと思うと、やがて球体は崩れ去った。そこにははやて。だが、はやての身を包むのは黒い騎士服に白いジヤケット。

手には剣十字の騎士杖と魔導書。頭には白い帽子。

背には、黒い三対の翼。

今彼女はもう・・・体にハンデを抱えた女の子じゃない。

「夜天の元に我に集え・・・祝福の風、リインフォース。セット、アップ!!」

祝福の白い風に愛された、最後の夜天の少女の覚醒であった。

「後は、あれを消すだけやね」

はやはてが黒い球体を指さす。

今さつきの戦いで、はやはては管制プログラムと防衛プログラムの分離を実行した。

で、白い球体が管制プログラムなので、あっちの黒いのは防衛プログラムなんだろ？。だけど、さつきからずっとなんかが渦巻いてるだけだ……グロッ。

「おそれらく分離されたプログラム同士を結合して、再起動を図るうとしているんだろう。僕たちは、あれのリンクアーカーをアルカンシールの軌道上に転送すれば勝ちだ」

クロノがきつちつと説明してくれる。さつと一番気苦労してるのは『苦労なこと』だ。

「でも、さつきの戦いでもかなり手こずったのに……なにか対策とかできるの？」

フェイトがつぶやく。その言葉にみんなが若干沈んだ。クロノは周りをちゃんと見渡せるらしい。なので、一人……そつ、俺だけみんなと顔色が違うのをすぐに見抜いた。

「おい、君。ここにそんな顔ができるのなら、この状況を打破できる方法を持つてるのか？」

「まあ、100%は保証しないけどある」

「何、それは本当か！？」

「けど、ちょっとお願ひがある」

「・・・なんだ」

まあ警戒するか。それはしょうがない。

「クロノ。お前、デュランダルは受け取ったのか？」

「ああ、ってなぜそれを！？」

「うつさい。じゃあグレアムには会つたのか」

「ああ・・・八神はやてのことか？」

「後シグナムらな。こいつらのことを無罪放免にしてくれ

「・・・それでいいのか？」

「ああ。それが出来るなら」

それをクロノは了承した。なので、俺は作戦を話す。
それを聞いたみんなは驚いた表情をする。

「な？あんがい簡単だろ？」

「確かに簡単だけどよ・・・」

「すつごく、疲れるね・・・」

俺が提示したのは、バリア毎に相性のいい各々の最強の攻撃を叩き込んでバリアを破壊。その後、無力化。
最後に、なのは、フォイト、はやて、そして俺の4人で攻撃というプラン。

「しかし、ギャンブル性は否めないな」

「理屈上はどうもないやつなんだ。それでもどうせならないなら俺が潰す」

「・・・こつそのこと君が全部やればいいじゃないか」

「それは嫌だ。消滅させても一緒にこの地球が消滅する」

闇の書の闇は本当に力の塊だ。あんなのを単騎でどうにかしようがないのが間違ってる。

よし、そろそろ位置についてくれ。函図はまだない

「君がやしてくれ。僕が考えた作戦じゃなしから、考えた人がやるべきだ」

一分がつた

そう言って、俺ははやての元に近寄った。はやってはいまだ不安な顔をしていた。

「私らに、なんとかできるんやろか・・・・」

「……せやな。千里くんやみんながいるんやから何とかなるな」「…………」

やつとはやてが笑う。うん、可愛いね。

さて、そろそろか?とか思つてゐると、闇の書の闇が覺醒する。

何度も見てもグロいな・・・FF6のケフカの前のボスみたいだ。

「チエーンバインド!!!」

「ストラグルバインド！」

「縛れ、鋼の輜—！でええりやあああああ—！」

ファミリア達のバインドでバリケードを次々と落としていく。やがて、闇の書の闇を覆つていたバリケードはすべて取り除いた。

「先ずはヴィータと高町なのは……」

「おう！」

「うん！」

名を呼ばれたなのはどヴィータはそれぞれカートリッジをロードする。

さて。奴のバリアは4層。外皮から対魔力、対物理、対対流、対熱の複合バリア。なんかこちらの攻撃に對して用意しましたよ感が否めないが、対処は論理上簡単。ただどのバリアもそれに対しても強力な防御効果を發揮するだけでほかのものは防御しないわけじゃない。なので、こちらは各自最強の攻撃を行使する必要がある。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

『G i g a n t f o r m』

グラーフアイゼンは巨大なハンマーに変形する。あれを見た連中十中八九ゴルディオンハンマーを想像するんじゃないか？みんなはどうだ？

「轟天、爆碎！ギガント、シュラアアアアアクツツツ！！！」

そのままアイゼンを振りおろし、バリアを割る。そのまま間髪入れずにはがエクセリオンバスターを放つ。

迎撃に闇の書のほうから触手が伸びるが、こいつの問答無用の砲撃にそれは意味をなさない。

そんなわけで、一枚目のバリアを割る。

「次、シグナムとフェイト」

「ああ！」

「はい！」

シグナムは静かに、闇の書を見据える。やがて、剣と鞘を合わせてカートリッジをロード。レヴァンティンは『』になった。

「剣の騎士、シグナム・・・炎の魔剣レヴァンティンの刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

『Borgen form』

さらにロード。『』の両端に弦が張られ、さらにロードすると矢が形成された。

「翔けよ、隼！」

『Sturm falken』

放たれる矢。炎を宿したそれはバリアと拮抗していたが、やがて碎く。

そして、バルディッシュ・ザンバー・アサルトを携えたフェイトは自分の体に全く不釣り合いな刀身のそれを振りい、迎撃するバリケードを粉碎する。

そして、魔法陣が展開され、ザンバーを構えた。

「撃ち抜け、雷神！！」

『Jetzember』

振り下ろされたジェット・ザンバー。展開時よりもさらに刃は伸び、バリアもろとも闇の書を両断する。

「今だ、はやて！」

「うん！」

最後の締め。はやての詠唱が始まる。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。
石化の槍、ミストルティン！」

そして闇の書は巨大な石に変わる。が、それも一瞬ですぐに脱皮が始まる。

「クロノ！」
「分かってる！」

クロノはすぐさまデュランダル・・・杖な？を構えた。

「悠久なる凍土。凍てつく棺の内にて。永遠の眠りを」とよ

デュランダルから放出される魔力が氷塊に変わり、闇の書の闇に伝つていき海面」と凍らせた。

「凍つけ！！」

『Eternal Coffin』

完全に氷結させる。それもすぐさま無に返そつと、闇の書の闇は氷塊を破ろうとしていた。

が、させむかよ！！

ディレクター：ミックタムヤクラーティオ・フルゴーリス
「遅延解放、雷の投擲！！」

他のみんなが攻撃している間に、詠唱しておいた魔法。一本では心ともないので出せるだけ出した。

それをすべて闇の書の闇に投げ込み、雷の槍で縫い付けた。

「よし、締めだ！4人で、討つ！！」

「...」「...」「...」

俺たちはそれぞれの位置に付く。そして・・・自分の最高の一撃を
叩き込む！！

「全力、全開！！スター・ライトお・・・」

一雷光一閃！アーティス・マサンバー

響け！ 純粋の笛！ ハグナロケ・・・

そして、俺は

「双腕解放！右腕固定、雷の投擲。左腕固定、千の雷。術式統合・
・雷神槍、巨神ころし！－いつけええええええええ！」

ネギの術式統合によるオリジナル魔法、巨神ころし。被害を最小に、かつ最高の攻撃力ならこれだ。

もはや小さな国なら完全に再起不能にできるくらいの魔力の爆発を巻き起こした。

最後は・・・シャマル！！

「リンクア抽出・・・捕ま・・・えた！－！」

「ユーノ、アルフ！！」

長距離輸送

「目標、アースラアルカンシェル射軸上！！」

「転送！！」

無事、転送も終了。あとはアルカンシェルに大事がなれば何とかなるだろ？。

『目標反応ロスト・・・再生反応、ありません！』

エイミィの声で、みんなが安堵の表情を浮かべた。

後は、リインフォースか。はやてらのためにもどうにかしてやりたいなあ・・・。

「なあ千里くん、さつきの魔法はなんや？」

「ああ、魔法を融合させて新しい魔法を作る術式だよ。この世界とは違う技術」

「・・・もし、蒐集行使で使えたなら教えてな？」

絶対嫌だ。

第10話 S i l e n t B i b l e (後書き)

千里「かなり早く終わらせたな」

作者「もともとA・Sは完全にプロローグ扱いだから」

千里「ひでえ！！」

作者「まあこんなバツと出の作品に期待してる人いないでしょ・・・」

「

千里「期待してなかつたらお気に入り登録してくれる人いないだろ」

作者「そりでね。いつも読んでくれる方に感謝です」

千里「で、いまだ感想とかないけどこの後どうするんだ？」

作者「一応後日談とそろそろprotologueの回収。それにまつわる話を書いてstsの準備。stsについては・・・見たいという人がいたら。どちらにせよ、原作にあった話はあまり書かないでその時期に、千里や千里の仲間はどう行動したかみたいな？」

千里「原作をそのまま書いてもつまらないしな」

作者「反響がなかつたら適当に短編書いて終わり」

千里「でも、話は練つてるんだろう？」

作者「う・・・」

千里「……とこう事なので、読者の方はもつしまじめいの駄作にお付き合ってね。また、やつてほしご話はこいつでも申してください

作者「つか……このあたりでどうしてもほかの人とかぶるよな」といひはじると

千里「……やつてお前の腕だらへ。」

作者「やーせん! ! ! 」

千里「まつたく・・・」

作者「とこうわけで。次回はロインフォースの処遇と一応のなのは達のその後。んで、よつやくあの謎のヒイロ似の少年が・・・?」

千里「最後に。じこまで読んでくれた方に多大な感謝を。それではー。」

第1-1話 チートと後日談とリインフォース

さて、闇の書もばっちり葬つたので戦いは一応の収束を迎えた。

結局どうなったかといえば、はやて達には観察処分 + 管理局入局といふことでクロノは手を打ってくれた。
まははやての体はまだ完治してるわけじゃないので、しばらくは守護騎士が仕事をこなすことになるだろつ。
んで、俺への処遇は同じく保護観察処分。ただし能力が能力なので管理局入局が前提だそうだ。

もちろん、俺は入局する。あの女の命令を遂行するつてのもあるけど……やっぱり、ね？あいつらの事が心配なわけでも。

「それで、入局形式はどうする？嘱託魔導師と正局員とあるが」「そうだな……ちなみにどう違うんだ？」

「君の世界で例えれば、嘱託魔導師は契約社員。正局員はその名の通り正社員。嘱託魔導師は権限に制限がかかるが、職務負担は少なめだ。逆に正局員は入局に際して士官学校に通う必要があり、職務負担が多くなる場合もあるが、権限の制限がない。まあ一長一短だな。ここで決めて後々また変えられるからあまり気に止めなくて構わない」

「ふむ、じゃあ正式入局にするよ」

「わかった。手続きを取つておひづ。…そういえば名前、聞いてなかつたな」

「千里。舞阪千里。呼び方は、クロノが呼びやすくなつたよ」としてくれ

「なら、千里と呼ぼう。君、デバイスは？」

「…………え？」

「いや、だから『デバイス』

「ないです」

「なッ！？ フェイトが言つていた剣はなんなんだ！？」

「ああ、これ？」

そう言つて、俺は千将・莫耶を呼び出した。

「そう、それだ。君の『デバイスではないのか？』

「いや？ あくまで稀少技能で作った剣。名前は……『宝具生成』

「稀少技能」。異能の力を持つ武器を任意に呼び出す能力か。まあ、
詳細は構わないか。では入局手続きを取るときに登録申請届を出
しておこう」「うー

「ああ、サンキュー」

それからは、なのはやフェイトらとこれからどうするかを話した。
アニメ見て知つてはいたけど、9歳の女の子がいつも未来を見据え
てこるのはとても微笑ましいものだな。

で、皆が気になるリインフォース。

まあこれは…………回想形式で話しますかあ！
説明だるいし。

はやてはあの後魔力エンプティで倒れた。
ライブラで調べても大したものでもなかつたので、八神家に帰つてベッドに寝かせておいた。

その夜。

「よお、リインフォース。優雅に月見か？」
「……ッ！？ああ、千里か。そうだ、月見だ」「やつぱり平穏だからか？」
「それもあるな。だが……一番は君達の優しさに触れたから、今はこうして慈しみを持っているのだろうな」

静かに笑顔を浮かべるリインフォース。

元より持つている美しさに月の光が被さつて……とても綺麗だつた。

と、同時にリインフォースの言葉に引っ掛けりを覚えた。

「今は？」

「ああ、今は、だ。私が居る限り、闇の書はすぐに復活する。だか

「…明日、高町なのはとフロイト・テスター・ロッサに頼んで私を消してもらひ」

「……じゃあ、闇の書のバグが無くなつたらそれを取下げてもらえるか?」「

「……出来るのか?」

不安げな表情はそのままに、淡い期待を寄せたリインフォース。

「出来るんじゃない、やるんだよ。…ちょっと額を俺の額に当てる

くれ

「ん、分かったよ

リインフォースはお互いの額をあらわにさせて、額を引っ付けた。
……やばい、リインフォースが綺麗過ぎる。

理性で本能を押さえ付けて、俺は術式を発動させた。

「…『ライブラ』

知つてゐると思うが、敵の能力を見破るFFシリーズ皆勲賞の魔法。
が、俺はしようと術式を改造して対象の知りたい情報を確実に把握
出来るようにした。

ちなみにアーティファクト『いどねにしき』みたいな読心はムリ。

「…ん?この灘んだ魔力は?
ああ、これがバグの元か。

「…よし、後はこいつを矯正するだけだ
「…いや、もういい」

「ああ？」

「私のためにここまでしてくれたのは感謝する。だが……」

「じゃあ、おまえは主を放つておいて自分はサヨナラか？自分の境遇を利用して逃げてるだけじゃないのか？」

「……ッ、それは

「今までずっと苦しんだんだ。だからわがまま言つてもいいんだよ」

「……だが、私はこの力でたくさんの命を奪つた。その償いは……」「生きろ。今まで命を奪つた分、そいつらの分まで命を輝かせろ」

術式設定……よし、これなら。

「お前の力がどれだけ破壊を呼んだかは俺には解らない。けどな、お前が何をしようが……お前ははやてにとつて大事な存在で、大切な家族なんだよ」

「……だが」

「だが、でも、待つたはなし。それにヴィータあたりに怒鳴られたかないだろ？」

「……」

「…………あ、すまん」

「どうした？」

「先に謝つておく」

……はあ、こんな術式じゃないといけないか。
まあいいか。はやてが泣く姿を見ないで済むなら。

「術式、『天使のささやき』」

そつ言つて俺は……リインフォースの頬に……キスした。
ぎゃああああああ！俺のバカバカ！リインフォースがむっちゃびっくりしてるじやん！しかもファーストキスがデバイス！？や、美人

だからいいけど…やっぱダメだ！各所から攻撃が来る…！

「……せ、千里？」

「……ごめんなさい。はやてや守護騎士にはチクらないでください
いやまあそれは構わないが……」

「それで、身体の調子はどうだ？」

俺は成果をリインフォースに聞いた。

リインフォースはしばらく目を閉じて、なにやら体内に術式をかけていたが。

「……ああ、最高だ」

そうして、リインフォースははやての元に残れるよくなりました。

同時に、俺は何かを失った気がした。

「……とまあこんなわけです。

リインフォースファンの方ごめんなさい。私は大変なものを作り

でござました。

とは言え、あの激んだ魔力が力を生んでいたのは事実で、あれから
リインフォースの魔力はA A程度に落ち着いた。
ユニゾンは一応出来るらしいが、はやてはリインフォースを戦いに
寄越したくないとのこと。

とまあ、回避すべき未来は回避出来た。

後はまあ、士官学校はいい。管理局入局もね。

私生活をやはり忘れていた。

うげえ…………どうしようかな。
なのはらりに話を聞いてみるか。

第1-1話 チートと後日談とリインフォース（後書き）

千里「今回短いな」

作者「うん、今日同期で飲み会したから予定より書けませんでした。期待されていた方、後リインフォースファンの方、申し訳ございません」

千里「…………無茶苦茶恥ずかしかつたがな」

作者「まあ頑張れ。それではスペシャルサンクス。ドウルジ様、そして活動報告に書かれたkyo様。ありがとうございます」

千里「え、そっちも？」

作者「だつて数少ないコメントだし。尊敬する作者様だし」

千里「思えばコレを書きはじめたきっかけがkyo様の一次創作だったな」

作者「アレを読んだ時世界が変わった」

千里「そこまで！？」

作者「まあ眠いからもう次回予告な。書き切れなかつた後日談と後ハ神家の日常でも書く」

千里「あいつは」

作者「後で」

千里「オイ。では、これを読んで下さった方、ありがとうございます。
す。次回もまた読んで下されば幸いです」

第1-2話 わかつてこるんだ、」の話がじじつか感マックスなのは

はい、前回からの続きね。

そのことを今からなのは達に話そつとじしてこます。

でもなんだうう・・・すゞく嫌な予感がするんですけど? ひ、こ

の今なのは達がいるであろうこの部屋。

『だか・・・りくんには・・・』

『で・・・ほ・・・しょ「う・・・』

『それは・・・』

よし、引き返すか。そう考えたとき、何者かに腕をつかまれた。

「あの・・・び「うして俺の腕を拘束するのですか? 姉御」

「すまない。主はやての命だ」

俺の腕を掴んだのはシグナム。休憩中だったのか服は武装隊のアンダーダーだった。

「いやいやいやいや。なんか嫌な予感しかしないんですが」「大丈夫だ・・・たぶん」

すつじい不安なんですけど。

「なあ。あとで好きなだけ模擬戦してやるから、見逃してくれないか?」

「・・・すまない、お前を連れて行かねば・・・その、主がセーラー服とやらを着させるぞと・・・」

「おおおおこい! ! ! なにやつてんのはやて! ! ?」

リインフォースが言つてたなあ・・・はやてが最近アニメにハマつたとかなんとか。きっとそこから悪巧みのネタを引っ張り出しているんだろう。

「というわけで・・・すまない」

「・・・ああ」

シグナムに免じて、その扉をぐぐつた。

そこで展開していたのは何やら俺の住むところについてあれこれ言つてはいる三人娘と、額に手を当てるため息をついているクロノが。

「だから千里くんは私の家に住むんや・・・」

「だ、ダメだよはやってちゃんとばかりするーー！」

「そ、そうだよそんなの・・・千里に迷惑だよ・・・！」

「そんなことない！千里くんは私たちと一緒に住んでたんやからーーこれからも一緒にーー！」

「説明してくれクロノ」

「・・・ああ」

そういうわけでクロノは簡単に説明してくれた。読者の皆様にはわかりやすいくらいに箇条書きにして作者が見せてくれるんだ。

俺がクロノに家族のこととかそれまでの生活を話す

なのはヒロイトがそれを影から聞いていた

その後クロノとこれからについて話していたはやてに、なのはヒロイトがO HANA SHI（会話的な意味で）しに突撃。俺

とはやての関係を問い合わせる。

はやて「なら千里くんに決めてもうおひやないの……」

俺、はやてに脅されたシグナムに捕まる

俺（。A。）今！」

・・・オーケー、事情は理解した。

「で、なんでいちいち俺が呼ばれなきゃいけないんだ」「だつてはやてちゃんばかりずるい」

「・・・・・・・（「ク」）

なのはの言葉にフェイドがすく肯定の態度を示す。対してはやては。

「そりや、私が家族と認めた男の子なんや。今まで暮らしてきたんやから、これからも変わへん」

「「むむむ・・・」

つか俺一人ぐらいでそんなにも」「「どうでもよくな」「お前らなんなの！？人の心に十足で踏み込まないで！？」

「いやまあ。俺ははやての家でいいよ。なんか今更クロノやコンテイさんに頼つたらなんかダメな雰囲気だわ」

ここで濁したらただの意氣地なしだし。それにこれくらいで人生なんか左右しないって。

「せひ、千里くんも私のところがええんや」

「う、うう~」

「はやてちやんのケチ~」

はやは勝ち誇ったような顔をし、なのはとフエイトは心底負けた
ような顔をしていた。ほつといたらハンカチを噛んできいーーーみ
たいなことをしそうだ。

「どうわけで、これからもようしょつな? 千里くん」

「あ、ああ」

か、可愛い。・・・って誰だよまた小石を投げた奴はーー。
でも。ここで引き下がる魔王と死神ではあるまい。なぜなら、俺の
第六感がビンビンとコンティンションレッジを発令しているのだから。
とか思つてこたら、ここせひとんでもないことを言つ出した。

「「な、う・・・千里くんと一緒に学校行きたいーーー。」」

「・・・・はあーーー?」

こいつらなに言つ出すんだー?とか思つていたらクロノが補足して
くれた。

「その・・・なんだ。お前が学校まだ学校に通つてないことも簡抜
けなんだ。というか・・・話さなければ、僕はきっと病院のベッド
だつた」

「・・・クロノ、お前も苦労してんんだな」

おこおいおいおこ、クロノにも〇 H A N A S H I するのかよ。俺はアーメの「こつらと現実のこじつらのギャップに頭が付いていけない。

「気になる男の子のことを知りたいのはどんな年齢でも一緒だと思うわよ？それに、お友達と一緒に過ごす時間はこれから一生の宝物になるんだから」

「リングディイさん」

「母を・・・艦長」

声がしたので振り返ると、そこにはアースラの艦長にして、クロノの母親。リングディ・ハラオウン提督がいた。つかほんとに若いな・・・

・いくつだ？

「いやいや、俺。戸籍とかいろいろないですよ？俺の家族いないし、少々特殊だったんで」

クロノには超貧乏で放浪生活をしていたといつ、ビージーの借金執事の設定を引っ張り出した。それを聞いたクロノとリングディさんは静かに涙を浮かべていたといつ。

「大丈夫よ。お金とかは面倒見てあげるから。あと戸籍なんてこいつで勝手に用意するし」

いやいやいやいや、音符マークを語尾につけられても。しかもそちらと黒いとこ見せましたよね？

「千里くんと一緒に毎日登校・・・ええなあ・・・」

おはやて。妄想癖が移つたか？

「…わかりました。通います」

そうして、また俺は小学校に通うことになった。

「で、いきなりすまないがちょっと頼まれ」」としてくれないか」

「頼まれごと?なんだ?」

それから3時間たつた現在。俺は問診受けてるはやてと、デバイスの調整のために席を外したフェイトを待つためになのはと休憩していた。そこにクロノがやってきたというわけだ。

「ああ。それが、この第23管理世界に謎の転移した痕跡が発見された」

管理世界なのに俺たちが?」

「局員が調べたんだが、何も異常を現地で発見できなかつたんだ。

「俺の腕試しと初仕事を兼ねてか？」

「ああ。」の仕事は現地協力者扱いで受けてもらうから、おどがめ

はないぞ」

そうか。まだリンディさんが書類を作ってる途中なんだな。

「分かつた、調べてみるよ」

「千里くんが行くなら、私もついて行つていい?」

「と言つてるんだが」

「分かつた。報告しておくよ。場所は・・・分かるな?」

俺はうなずいた。次いでなのはも。

そんなこんなで、俺たちは第23管理世界に行くことになった。

「へえ、なんか地球に似てるね?」

「・・・ここだけ見ればな

「ここは第23世界「フリケード」。端末情報によると、ここは魔法が生活の一部と化している魔法世界だ。

ここ出身の魔導師も多く、魔法学校なるものもあるらしい。だから、なんか魔物っぽい生き物が普通に謳歌してるし、列車だって銀河鉄道999ばかりに空中を走っている。

・・・空中を走るのに石炭とかいるのか?

「まあいいや。とりあえず、魔力反応補足・・・」

俺は、魔力反応を探索する。波長は端末に記録してるので、捉えたらアラームが鳴るはずだ。

『どかんと一発……いつてみよおーおーおー……』

「ふえー…？」

「なんでこの歌なんだよー…！」

誰設定したしー？・・・すぐさまアラームを切った。ふむ、ここから10キロ離れた森林地帯か。

「よし、ここから南西に10キロ。行くぞ」

「うんー。」

で、問題の場所。ここから魔力反応があるんだけど・・・。

「人つ子一人いないね」

「やうだな・・・」

目下捜索してけどぜんぜん見つけられなかつた。ここが絶対怪しいのに・・・。

「ねえ、千里くんなんかいろんなアイテム出せるんだよね。それでなんとかできないかな？」

「ああ、その手があつた。でも宝具出すほどじゃないな・・・魔法で姿隠してるなら、魔法で破る」

俺は周辺の座標を設定する。そして、術式設定。

「汝を取り巻く全ての魔。引き裂き、取り去り、浄化せよ。プリフイケーション」

プリフィケーション。FFで例えたら「スペルみたいなもんだ。術式範囲は一番魔力がする範囲半径5メートルを選んだ。そこら一帯に魔力の光が降り注いで、魔力による膜が割れた。

「す・・・すごいね」

「こんなものは序の口だぜ」

そして改めてそのあたりを田下捜索する。そうすると

「千里くん、あれ!」

なのはが指差した先には俺らと同じくらいの年の男の子が倒れていた。その服はボロボロで、そいつ自身も傷だらけだった。

「つて、ボロボロじゃないか! なのは。治療するぞ!」

「うん!」

すぐさま降下して、そいつの元に駆け寄る。見たところ、どこかの施設のやつなのだろうか?なんか管理局のマーク入ってるし。

「なのは、どうだ?」

「うん・・・傷はすごいけど、命に別状ないみたい」

「そうか・・・良かつた。なのは、そのまま治療してくれ」

「つて、千里くんはやらないの?」

「ちょっと待つてくれ・・・気になるものが」

俺は男の子の手に握られていたデバイスを見た。それに、俺はライブラを使う。

・・・ん? 非殺傷設定なし? 管理局のデバイスの殺傷設定で・・・。

しかもこの剣の状態レッドゾーンギリギリだし。なにがあった……。

俺は……」一つをよく観察する。

髪の色は黒に近い茶髪。顔立ちはなんかヒイロに近いか……。

そして、そいつがゆっくり目を覚ました。次いで、ゆっくりと俺を見る。

その瞳は……、あの女に聞いた特徴に酷似していた。

『青く澄んだ瞳の少年――――――

「千里くん、後ろ――――――

なのはの切羽詰つた声。俺は振り向く。そこには1体の魔物がいて、今すぐ攻撃に入ろうとしていた。

やばい、気づくのが遅すぎた。来る前に腰にエクスカリバー携えていてけど抜けるか！？

そう思いながら、本能的に柄に手を掛けようとしたが、手は空を切る。

「――？」

アバロン
ない。確かに全て遠き理想郷に収めていたのに！？すると、少年もいなくなつてゐることに気付いた。まさか・・・・。

「破魔・竜王刃」

ここにいる誰でもない声。その声の主はわかっている。あの少年だ。振り向くと、その魔物を一刀両断した直後のように、斬られた魔物

は真つ二つに割れた。・・・鮮血が吹かなかつたあたり、概念種だつたのかも知れない。

エクスカリバーを手に握つたまま少年は、ゆっくり俺となのほうへ振り向いた。いや、なのはは見ていないだろうな。俺だけを見ている。俺は・・・なぜか、視線を外せなかつた。

「問おう・・・貴方が、かの異能の少年か」

それが・・・これから苦楽を共にすることになる少年、桜井一騎との出会いだつた。

第1-2話 わかつてこるんだ、この話がじじつか感マックスなのは（後書き）

作者「……頭悪い展開のは、どうか気にしないでください」

千里「まあ。よひやく問題の少年だな」

作者「うん、このためだけに書いた」

千里「しかも最後ネタだし」

作者「かつこいいじゃんセイバー」

千里「はあ……で、もつ寝るんだろ」

作者「明日も仕事……一番正念場○△」

千里「とまあ、作者はけつこう多忙かつストレス溜まる仕事してる
ので、誤字脱字等は出来るだけ気にしないでください。もちろん、
発見次第直しますので」

作者「ふいー、寝る。それではこれを読んでくださった方に多大な
感謝を」

千里「次回は、新キャラ桜井一騎についての話だな。それがまた番
外編になる・・・かも？」

なのは

- s i d e n a n o h a -

あの時。辛うじて分かつたのは、私が治療していた男の子が千里くんが腰に差していた剣を引き抜いて後ろの魔物に切り掛けたことくらい。

後ろに、魔物が迫っていることなんて全然分からなかつたし気配も感じなかつた。

そして、その男の子は今…千里くんを見ている。
千里くんも、その男の子を見ている。

見た目は千里くんよりちょっとキリッとしてて大人びた感じがするなあ……でもでも…千里くんは親しみやすいし…ってにゃあああああつー！私なに考えてるの！？

「……ああ」

男の子の問い、『貴方は、かの異能の少年か』に対しても千里くんは頷いた。

異能つてなんだろ？千里くんの宝具生成かな？

「やうか……」

やうかって男の子は静かに目を閉じた。
そして、

倒れた。

「え、ちょっと……ええーー！？」

さつきまでのなんだったの！？いきなり電池が切れたロボットみたいに倒れちゃった。

「オイ、大丈夫か！？」

千里くんがいち早く駆け寄つて抱き抱え、体の確認を始めた。

「脈拍心拍安定…呼吸も規則的……」

「寝てる…だけ？」

「ああ。多分今まで気を張り詰めていたからじゃないか？人に会つ

たから安心した的な」

「それなら良かつた。じゃあどうしようつ？基地に連絡する？」

「いや…アースラに連れて帰る」

「え、でも」

「…管理局のマークが入った病院着には、意味があるかもしれない」

その時の千里くんは、何か重大な事件の予感をこの男の子から感じたみたい。

ただつまらなくて逃げ出しただけじゃないかなあ。それじゃあ傷だらけな理由がつかないし……「アーン……」。

ここはアースラ医務室。

連れ帰った少年をベッドに寝かせて、布団をかけてあげた。

「これで大事には至らないこと思つたが、何かあつたら連絡くれますか？千里くん」

「分かったよ、シャマル」

怪我の治療はシャマルが全部こなしてくれた。
さすが湖の騎士。

だけど、「弓を締まつた体だった…／＼」とか言ひ齒あは記憶から消しておいた。

「それで、この子がいたのか」

「ああ…と言つても、丁寧に魔法で身を隠していた。ただ、見たところこりこりにそういう魔法は使わなさそうだし、多分魔法具使ったんだろうな」

「なるほど。だとしても妙な話だな」

クロノは怪訝を浮かべる。

俺も腑に落ちないことはたくさんあるが…。

ひとつはまあ、こいつが管理局に関わりがあるやつだつてことが丸分かりなこと。

二つ目はなぜ姿を隠していたか。アースラガこちらの座標特定するまでに、魔力の残滓を調べたらあの結界はやはり魔法具…それもAAクラスのだ。

使い捨てだったのか俺のプリフィケーションが破壊したのかは定かじゃない。確実なのは、こいつが追っ手から逃れるために使用したことだ。

三つ目は、こいつが見付かった時の状況と状態。

こいつは見付かった時、全身傷だらけだった。そして手に握られていた剣型ストレージデバイス。状態はレッドゾーンぎりぎり…つまり今すぐメンテしないとやばいレベルだ。なぜここまでデバイスを酷使したのか…。

「リングディさん、どう思いますか」

「私は、そうねえ。どこかの管理局被れの違法科学者がこの子を改造しようとしてたんじゃないかしら。それを見破ったこの子が逃げ出して、追われたのでは」

「僕も同意見だな……。しかし、君とシャマルが調べて異常が見つからなかつたんだろ?」

「ああ。残念ながらな」

本当に改造魔導師や人造魔導師なら、何かしらの改造した痕跡が体なり中身なりに現れる。

だけどこいつには見当たらない……ああもうなんでいきなりこんなめんどくさいのをやらなきゃいけないんだ！とか思つていたら、そいつは田を覚ました。

「…………んつ……」

すう、と瞳を開いて起き上がる。そして辺りを見渡した。

「…………こには」

「時空管理局、次元航行艦アースラの中。僕は本局執務官クロノ・ハラオウン。こちらがアースラ艦長のリンディ・ハラオウン。最後にこちらが民間協力者の舞阪千里。早速で悪いが…………こちらの質問に答えてくれないか？」

「分かつた」

「では、まず。君の名前と所属を聞こつか」

「時空管理局第23管理世界魔導師見習…桜井一騎」

少年、桜井一騎はそう告げた。まだ見習いなのかよ、こいつ。の割にはあの圧倒的な爆発力……。

「見習…？ふむ、ではあそこで何をしていたんだ？」

「…分からぬ。気付いたらああだつた。ただ…そうなる前に、俺は、魔物の巣に放られた。そのもう少し前に、白くて長い髪の人魔法具を渡された」

ああー、やっぱり魔法具だつたんだな。…つて、白くて長い髪の人？まあ A, SJS Striker Sまでの期間は空白だし、ゲームやサウンドステージで語らわれていても何が起きるか分からぬし。

そういう原作には出てこない人々もいるんだろうな。

「なるほどな。では君は任務か何かでの事故…ということか」

「…まあ」

「さあって。君のことだぞ?」

「あそこには強力な魔物がいるらしい。だからきっと尖兵かなんかなんだろう…俺は」

「強力な魔物?」

「名前は…知らない。あいつらが言つては、不死身らしい」

「Dのチートだよ。
Dのセルや魔人ブウだよ。」

「分かった。一応、Dで保護という形にするが…、回復したら戻るか?」

「…構わない。きっとあいつらは死んだと思ってる」

「そうか…」

クロノはちょっとと聞いてはいけなかつたかな的な顔をした。
ところでこいつランクどうなんだろ。聞いてみるか。

「なあ、…ってどう呼ぼうか」

「一騎で構わない」

「じゃあ一騎、お前のランクは?」

「入りたてだから、D」

D。つーことは格付け上はもう最弱レベル。

なんだけど、こいつ俺の『約束された勝利の剣』奪つて敵を斬り倒したんだよな。そんな奴が弱いはずないし…なにより、俺が探すの

を頼まれた人だ。なんとかならないものか…。

「リングディさん、こいつをここに異動つてことに出来ませんか？」
「あらいきなり。でも実力がどうあれランクが〇ならいつでもアースラに入れられるわ。幸いにも、フリケードの方はすでにIMA扱いにしてるみたいだしすぐに移すわね」

リングディさんは快く了承してくれ、すぐさまコンソールを取り出した。

つかあれからそんな手際よくIMA扱いかよ。いくら反応がないからってそれはないだろ…まさか管理局つてこんなんばっかか？

「…というわけだが、構わないか？桜井一騎」「問題ない。どうせ消える命だったんだ…あるだけありがたいさ」

「こいつもこじつで無茶苦茶ストイックだし。可愛い^{エヌマ・エリショ}いげないなオイ。……お前が言うなとか思ったやつは一人ずつ『天地乖離す開闢の星』だからな。

「ん、異動願受理…と。では、桜井くん。今日から君はアースラ所属になります。異存はありますか？」

「ありません」

「「それでは…ようこそ、アースラへ」」

そうして、一騎はアースラに異動となる。
展開がテンポ良すぎだけど、じ都合主義なんだらうな。

「へえー、桜井一騎つていうんだ」

「ねね、好きなこととかある?」

「よしもとは好きか?」

「…助けてくれ、千里」

三人娘の怒涛の質問攻めに、一騎は助けを求める視線を送つてきた。

ちなみになぜ今の状況があるかというと、あれからクロノが俺にアースラの案内をしてやつてくれと頼まれて、俺はそういうのはまださっぱりなので三人娘に助けてもらおうと思つたらこの始末である。

…人選間違えたか。

「はいはい、その辺にしてアースラの中を散歩するぞ」

強引に場を収めて、三人娘+俺+一騎というメンバーでアースラ内を散策。まあ空き部屋が多いからかあまりあちこち行くことはなかった。

「うん、これで全部だね」

「だな。サンキュー、三人とも」

「ありがと、なのは、フロイト、はやて」

丁寧にも、一騎はそれぞれ挨拶した。さらに静かな微笑を称えて。ほら見る、三人とも真っ赤じゃないかよ。

「ええ！？そんな謙遜だよ！」

「せやせやー私ら特別なことじとりへんえー！」

「……（ ハクコク ）」

フロイト。なんか喋れよ。

まあいいか。こいつも出自がアレなだけで中身は全然普通。俺と比べて差異があるのは性格くらいかな。

元々そういう性格なのか、全体をくまなく見ている指揮官タイプだ。

『千里くんになのはちやん達、楽しんでる？』

「Hイミヤさん…どうしたんですか？」

『ん？いや千里くんに用があつてね』

「どうかしたんですか？」

Hイミヤから？俺何かしたつけ。

『うん、正式に千里くん聖祥転入が決まったからその報告にね』

「そんな。そういうのは後でも構わないのに…」

『でもなのはちゃん達すつゞく待ち遠しくしてたし、ね？』

Hイミヤがそう言つと、三人娘達は急にそわそわしたり明後日の方向を向いていた。

が、一人だけ狸顔をしていた少女が。こいつ……また悪巧みを…

…。

「なあなあハイミヤさん。一騎くんはあー…どないするん?」

『一騎くん? ああー… あたか、はやてちゃん…』

「ううふつふつふつ……ほりま、一騎くんだけ置いてけぼりなんて、可哀相やん?』

やばい、こいつ一騎まで巻き込む氣だ。しかも意図を読み取ったのはヒューリックだす。

「もうだねーはやてちゃん。みんな一緒にいいよね?』

「うん、それがいいよ。ハイミヤ、なんとか出来ない?』

いやいや、そういうのは形式美つてものがあるでしょ。そんなことだから読者がこの駄作が死ねばいいのにとか思うんじゃない。当事者の一騎空氣だし。

『……………じひしましょう、艦長』

『いいんじゃないかしら? 一騎くんだって遊びたい盛りの歳だし。じゃあ一騎くん、じうする?』

「…………断る気じゃなこですよね」

そうして、俺に続いて一騎までも巻き込まれてしまい。三人娘の通う聖祥に入学することになつた。

なのは（後書き）

作者「誰か練炭をお持ちの方は私に譲ってください」

千里「さすがにこれはないだろ……」「…………

作者「このへんはもう勢いで書いた。べ、別になのはGODでクロノ使ってなのはに1~3回完全勝利された腹いせしたわけじゃないんだからね！」「――

千里「ツンデレキモツ」

作者「〇〇〇〇

千里「…………まあ、」のことはなんとかして受け入れてくれば幸いです「

作者「とまあ、なのはらの強引頑固ぶりが書けたなど

千里「もはや天上天下唯我独尊だな、アレは」

作者「しかしここからはしばらくオリジナルストーリーのターン！マテリアル絡みの話にオリジナルの設定を組み込んでストーリー提供したい所存です！」

千里「ようやく俺も暴れられるのな」

作者「十分暴れてるじゃん。一騎が皆に打ち解けていく過程を書きたいのが一番。（小声で）そしてフラグの乱立しあう……」

トヨハラ・マサヒロ

作者「ふははははははーーー！私が第六天魔王織田信長じゃああああああああ！」

千里「やめに！－あ、読んで下された方にほ無上の感謝を。ではまた次回…」

作者「くつくつくつ…貴様らにはハーレムといつ名の地獄をだな…」

千里「那也是我的事了。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916z/>

魔法少女リリカルなのはRewrite

2012年1月12日22時18分発行